

ぎ おん ばる 遺 跡
祇 園 原
かす が ち く
春日地区遺跡第2地点

県道木城西都線1時間構想道路整備事業（春日工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター

ぎ おん ぼる
祇 園 原 遺 跡

かす がち く
春日地区遺跡第2地点

県道木城西都線1時間構想道路整備事業（春日工区）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2003

宮崎県埋蔵文化財センター



祇園原遺跡全景及び祇園原古墳群遠景

序

宮崎県教育委員会では、県道木城西都線1時間構想道路整備事業に伴い、平成12年度に宮崎県土木部高鍋土木事務所の委託を受け、祇園原遺跡及び春日地区遺跡第2地点の発掘調査を実施いたしました。

両遺跡のある祇園原地区は新田原古墳群の中に位置しています。祇園原遺跡の近くの百足塚では象形埴輪が多数出土して話題になりました。

祇園原遺跡では古墳時代の須恵器が多く出土しました。これはこの近辺の須恵器としては、かなり古いものです。春日地区遺跡第2地点では後期旧石器時代から縄文時代にかけての遺物や遺構が数多く検出され、両遺跡がこの地域の歴史を解明する手がかりの一つになったのではないのでしょうか。

本書が学術資料として、あるいは学校教育や生涯学習の資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する認識や理解を深めるための一助となることを期待します。

最後になりましたが、調査にあたって御協力いただいた関係諸機関をはじめ、御指導御助言をいただいた諸先生方、ならびに地元の皆様方により心より厚くお礼申し上げます。

平成15年3月

宮崎県埋蔵文化財センター

所長 米良弘康

例 言

- 1 本書は、県道木城西郡線1時間構想道路整備事業(春日工区)建設に伴い、宮崎県教育委員会が実施した兄湯郡新高町所在の祇園原遺跡及び春日地区遺跡第2地点の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、宮崎県土木部高鍋土木事務所の依頼により宮崎県教育委員会が主体となり、宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 現地での実測・写真等の記録は祇園原遺跡については柳田宏一・松永寿久、春日地区遺跡第2地点については加藤学・松本茂が行った。
- 4 空中写真については㈱スカイサーベイ九州に、自然科学分析については㈱古環境研究所に、地形測量については㈱福島測量設計調査事務所に委託した。
- 5 整理作業は宮崎県埋蔵文化財センターで行い、図面作成・遺物実測・トレースは調査員ならびに整理作業員の協力を得て、祇園原遺跡については柳田が、春日地区遺跡第2地点については加藤・松本が行った。特に春日地区遺跡第2地点の遺物実測・トレースについては本センター調査員の可児直典・重留康宏・柳田裕三・落合賢一の4氏に協力していただいた。
- 6 本書で使用した地図は国土地理院発行の1/50,000(第1図)、新高町教育委員会発行の新田原古墳管理計画平面図1(第2図)を使用した。
- 7 土層断面及び土器の色調は『新版標準土色帖』に拠った。
- 8 本書で使用した方位は座標北(G.N.)と磁北(M.N.)である。座標は国土座標第Ⅱ系に拠る。レベルは海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した遺構略号は次の通りである。
SC…上坑 SE…溝状遺構 SH…ピット SZ…不明遺構 SA…竪穴住居跡 SI…集石遺構
- 10 本書の執筆及び編集は、祇園原遺跡については柳田が、春日地区遺跡第2地点については加藤が担当した。
- 11 出土遺物・その他諸記録類は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

本文目次

第I章 はじめに	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織	1
第3節 遺跡の位置と歴史的環境	3
第II章 祇園原遺跡の調査	3
第1節 調査の経過と概要	3
第2節 遺跡の層序	5
第3節 遺構と遺物	5
1 縄文時代の遺物	5
2 弥生時代の遺物	6
3 古墳時代の遺物	13
4 近世・近代の遺物	19
第4節 自然科学分析の結果	22
第5節 まとめ	26
第III章 春日地区遺跡第2地点の調査	29
第1節 調査の経過	29
第2節 基本層序	31
第3節 A区の調査	32
(1) 遺構	32
(2) 遺物	34
第4節 B・C区の調査	43
1 旧石器時代の遺構と遺物	43
(1) 遺構	43
(2) 遺物	47
2 縄文時代早期の遺構	57
3 縄文時代後期の遺構	61
4 時期不明の遺構と遺物	
(1) 遺構	66
(2) 遺物	66
第5節 自然科学分析の結果	73
第6節 まとめ	77

挿 図 目 次

祇園原遺跡

第1図 祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点周辺遺跡分布図	2
-----------------------------	---

祇園原遺跡

第2図 祇園原遺跡周辺地形図	4
第3図 基本土層図	5
第4図 縄文土器実測図	7
第5図 石器実測図1	8
第6図 石器実測図2	9
第7図 弥生土器実測図	12
第8図 SZ1 遺物出土状況実測図	15
SZ1 横土層断面図	15
第9図 古墳時代の土器（土師器）	16
第10図 古墳時代の土器（須恵器）	17
第11図 近世の遺物（陶磁器）	20

春日地区遺跡第2地点

第1図 グリッド配置図(S=1/1000)	29
第2図 春日地区遺跡第2地点周辺地形図(S=1/5000)	30
第3図 基本土層柱状図	31
第4図 A区時期不明遺構分布図(1/300)	33
第5図 SE1・SE2・SE3土層断面図(1/80)	33
第6図 トレンチ1西壁土層断面図(1/80)	33
第7図 A区出土土器実測図(1)(1/3)	35
第8図 A区出土土器実測図(2)(1/3)	36
第9図 A区出土土器実測図(3)(1/3)	37
第10図 A区出土土器・土製品実測図(4)(1/3)	38
第11図 A区出土土器実測図(1)(1/2)	40
第12図 A区出土土器実測図(2)(1/2)	41
第13図 A区出土土器実測図(3)(1/2 1/3)	42
第14図 後期旧石器時代遺構分布図(S=1/300)	44
第15図 B区東壁土層断面図(S=1/80)	44
第16図 配石遺構実測図(S=1/80)	45
第17図 礫群実測図(S=1/20)	46
第18図 礫群実測図(S=1/20)	47
第19図 VI～VII層遺物 水平・垂直分布図	49

第20图	Ⅵ~Ⅸ層遺物 水平・垂直分布图	49
第21图	製品 水平・垂直分布图	50
第22图	剥片、碎片、石核 水平・垂直分布图	50
第23图	B区出土遺物実測图(1)	51
第24图	B区出土遺物実測图(2)	52
第25图	B区出土遺物実測图(3)	53
第26图	B区出土遺物実測图(4)	54
第27图	B区出土遺物実測图(5)	55
第28图	B区出土遺物実測图(6)	56
第29图	縄文時代早期遺構分布图(S=1/300)	58
第30图	縄文時代早期集石遺構実測图(1)(S=1/20)	59
第31图	縄文時代早期集石遺構実測图(2)(S=1/20)	60
第32图	縄文時代早期集石遺構実測图(3)(S=1/20)	61
第33图	縄文時代後期遺構分布图(S=1/300)	62
第34图	SA 1・SE 4 実測图(S=1/50)	63
第35图	SA 1 出土遺物実測图(S=1/2 1/3)	64
第36图	縄文時代後期実測图(S=1/20)	65
第37图	B・C区時期不明遺構分布图(S=1/300)	67
第38图	B・C区時期不明遺構出土遺物実測图(S=1/2 1/3)	68

表 目 次

祇園原遺跡

表1 出土遺物觀察表(縄文土器1)	10
表2 出土遺物觀察表(縄文土器2)	11
表3 石器計測表	11
表4 出土遺物觀察表(弥生土器)	12
表5 出土遺物觀察表(土師器)	16
表6 出土遺物觀察表(須惠器1)	18
表7 出土遺物觀察表(須惠器2)	19
表8 出土遺物觀察表(陶磁器)	21

春日地区遺跡第2地点

表1 磯群・配石遺構計測表	43
表2 春日地区遺跡第2地点層別 剥片・碎片出土数統計表	48
表3 春日地区遺跡第2地点 土器觀察表(1)	69
表4 春日地区遺跡第2地点 土器觀察表(2)	70
表5 土製品計測表	71
表6 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(1)	71
表7 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(2)	71
表8 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(3)	71
表9 A区出土石器統計表	72
表10 B区出土石器統計表	72
表11 層別製品出土数	78

図版目次

巻頭口絵	祇園原遺跡全景及び祇園原古墳群遠景	見開き
祇園原遺跡		
図版1	調査区 (調査区全景 A区南側 B区中央付近 A区Ⅲ層b上面 B区北側 SZ-1完掘状況 SZ-1拡張部分土層断面 SZ-1遺物出土状況)	27
図版2	遺物 (出土した縄文土器 出土した石器 須恵器(甕) 須恵器(壺) 須恵器(甕) 須恵器(坏蓋) 須恵器(坏蓋) 須恵器(坏身))	28
春日地区遺跡第2地点		
図版1	春日地区遺跡第2地点遠景(東上空から)	81
図版2	春日地区遺跡第2地点全景(北上空から) A区全景 B・C区全景	82
図版3	A区遺物流れ込み B区遺物集中区	83
図版4	基本土層 礫群1 礫群2 礫群3 礫群4 礫群5	84
図版5	礫群7 配石遺構 SI2 SI4 SC1 SC2	85
図版6	ピット群 埋土中に土器・石斧を含むピット 埋土中に石鏃を含むピット SA1	86
図版7	縄文土器(1~27) 縄文土器(28~39)	87
図版8	縄文土器(40~62) 縄文土器(63~175)	88
図版9	縄文石器(台石 石皿) 縄文石器(SA1 ピット出土遺物)	89
図版10	ナイフ形石器 ナイフ形石器 細石刃 細石刃核 細石刃核	90
図版11	磨石 敲石 磨石 敲石 磨石 敲石 削器・二次加工剥片・剥片 石核・剥片 二次加工剥片	91
図版12	縄文石器 作業風景	92

第I章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

県道木城西部線1時間構想道路整備事業は、平成11年度の文化課の事業照会の際、新富町祇園原地区の周知の遺跡内を数カ所に渡り、道路改良工事をする事が分かった。以降県文化課と県土木部高橋土木事務所間で数回の協議がなされた。県文化課では平成12年3月に道路拡幅予定地の中にある祇園原遺跡の試掘調査を行い、古墳時代の文化層があることを確認した。

この結果に基づき、祇園原遺跡の調査を行うこととなり、平成12年5月8日より平成12年8月3日まで宮崎県埋蔵文化財センターが発掘調査を行った。調査面積は約4,500㎡で図1で示した現在の道路の西側拡張部分(地図での網がけ部分)を調査した。出土遺物の整理作業は平成13年度・14年度に同センターで行った。

引き続き祇園原遺跡より500mほど南西側の春日地区遺跡第2地点の試掘を宮崎県埋蔵文化財センターが7～8月に行い、同年11月より調査を開始した。

祇園原遺跡と同じ県道木城西部線1時間構想道路整備事業で、県道西側を拡幅、部分的には新設道路改良であった。

第2節 調査の組織

祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点の発掘調査は下記の体制で実施した。

	平成12年度 (発掘調査)	平成13年度 (整理作業)	平成14年度 (報告書作成)
宮崎県埋蔵文化財センター			
所長	矢野 剛	矢野 剛	米良弘康
副所長兼総務課長	菊地茂仁	菊地茂仁	大藪和博
副所長兼調査第二課長	岩永哲夫	岩永哲夫	岩永哲夫
総務課総務係長	亀井維子	亀井維子	野邊文博
調査第二課調査第三係長	菅付和樹	菅付和樹	菅付和樹
調査第二課調査第四係長	永友良典	永友良典	永友良典
同課調査第四係主査(祇園原遺跡調査担当)	柳田宏一	柳田宏一	
同課調査第三係主任主事(春日地区遺跡調査担当)	加藤 学		
調査第一課第一係主任主事(春日地区遺跡調査担当)		加藤 学	
調査第二課調査第四係調査員(祇園原遺跡調査担当)	松永幸寿		
同課調査第四係調査員(春日地区遺跡調査担当)	松本 茂		
同課調査第四係主査(祇園原遺跡執筆担当)			柳田宏一
調査第一課調査第一係主任主事(春日地区遺跡執筆担当)			加藤 学

第1图 祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点周辺遺跡分布図(S=1/50,000)



遺跡名

- | | | | | |
|---------------|----------|---------------|-----------|----------|
| 1 川床遺跡 | 2 上新開遺跡 | 3 一丁田遺跡 | 4 勘大寺遺跡 | 5 上別府A遺跡 |
| 6 瀬之口遺跡 | 7 上別府B遺跡 | 8 新田原A遺跡 | 9 新田原B遺跡 | 10 駒取場遺跡 |
| 11 尾小原遺跡 | 12 茶碗山窯跡 | 13 古開遺跡 | 14 新田原口遺跡 | 15 瀬戸口遺跡 |
| 16 春日神社横牧土手遺跡 | 17 祇園原遺跡 | 18 花畑遺跡 | 19 東城遺跡 | 20 有家城跡 |
| 21 向原遺跡 | 22 願山遺跡 | 23 八幡上遺跡 | 24 竹瀬B遺跡 | 25 竹瀬A遺跡 |
| 26 前神遺跡 | 27 竹瀬C遺跡 | 28 西中村遺跡 | 29 開元遺跡 | 30 山之坊遺跡 |
| 31 新田城跡 | 32 坂之上遺跡 | 33 春日地区遺跡第2地点 | | |

第3節 遺跡の位置と歴史的環境 (第1図)

新富町は、宮崎県のほぼ中央に位置する。東は太平洋に面し、西は西都市、北は高鍋町、南は佐土原町に隣接する。町東部は平野部が広がり、西部は丘陵地帯がつづく。

祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点は標高70m前後の洪積台地である新田原台地に位置する。本台地は日置川、鬼付女川、藤山川水系の浸食により幾筋もの谷が形成されている。西側は一つ瀬川により深い谷が形成されており、対岸には県内最大の古墳群である西都原古墳群が展開している。

祇園原遺跡・春日地区遺跡第2地点は、古墳数207基を数える新田原古墳群の支群のひとつである祇園原古墳群の中にあり、周辺には古墳が点在する。

祇園原遺跡はこの古墳群の北端に近い所にあり、くびれ部に造り出しを持つ全長84mの前方後円墳の92号墳(大久保塚)が遺跡の東側に県道を隔ててあり、数基の小規模古墳(円墳)が調査区に隣接する。また、北東部には弥生時代後期終末から古墳時代にかけての円形周溝墓・方形周溝墓や土壇墓が確認された川床遺跡がある。

春日地区遺跡第2地点は、祇園原遺跡の約1km南にあり、新田原台地の南端に近い。調査区の東側には春日神社がある。春日地区遺跡第2地点は、台地の南端から400mほど北にある。遺跡の東側は現在埋め立てられているが、南北にのびる谷になっている。谷を隔てた東側には新田原口遺跡、瀬戸口遺跡、春日神社横牧土手遺跡が、数百m南には花園遺跡がある。

祇園原地区は平成5年に県営は場整備事業が行われ、事業着手前の平成4年10月から平成5年3月まで事業区内の遺跡について宮崎県文化課により緊急発掘調査が行われた。その結果、墳丘が失われた古墳や住居跡などが確認された。

現在はこのほ場整備によって谷が埋められ旧来の地形が変わってしまっている。

両遺跡周辺には上述した以外にも図1に示すように多くの遺跡が点在している。

第II章 祇園原遺跡の調査

第1節 調査の経過と概要 (第2図)

調査は、調査区が南北に300mほどで、幅は10m弱の細長い調査区である。県道から人家への進入路が数カ所あり、調査区が分断されているので、調査区の中央付近の進入路で便宜上南側をA区、北側をB区と分けた。

調査は、南側のA区の表土の除去から始めた。バックホーを使って下げ始めたが、南端では拡幅前に立っていた建物の基礎の後があり、表土自体も15~20cmしか残っていなかった。ここではアカホヤ火山灰の下の層まで削平されており、30cmほど掘り下げたところで地山のプライマリーな層が確認されたので掘り下げを止めた。遺物・遺構等は全く検出されなかった。

上述の場所(A1区)の北隣の区(A2区)では牧草地だったこともあり、表土下の残存状況が良く、バックホーで30cmほど下げた段階で遺物か何点か出土した。ここからは作業員を使って手掘りや掘り下げを行った。その結果、表土から約60cm下で須恵器を中心とする遺物の集中部分(SZ1)が検出された。

遺物の集中部分は調査区の西側に偏って広がっており、隣接地との境が崩落するのを防ぐために調査

対象地の西側から50cmほど内側（東側）にしていた調査区を隣接地ぎりぎりまで拡張して遺物の分布状況を調査した。

A区では他にピットが多数検出されたが、建物跡として並ぶものはなかった。

調査区は北へ行くほど削平・攪乱の度合いがひどくなりB区ではアカホヤ火山灰層も次第に薄くなり、B区北半分では所々でブロック状に残る程度にまで削平されていた。

遺構としては調査区全体を南北に貫く深さ約80cm、幅約2～2.5mの溝が検出されたが、溝の中の遺物や調査区周辺の住民の話から昭和の初期まで使われていた溝だということが分かった。

B区でアカホヤ火山灰層の下の褐色土層に暗い方形のにじみが検出されたが、深さが数cmしかなく遺構かどうかの判別はできなかった。

調査はV層の上面の調査終了後、数カ所にトレンチを入れアカホヤ下の遺物・遺構の確認をした。B区北端に近いところではトレンチを設定してAT層まで下げて旧石器時代の遺物・遺構を探したが検出されなかった。このトレンチを使って火山灰分析を行った。

調査区全体をアカホヤ火山灰層の上面まで下げて遺物・遺構を検出して現場での調査を終了した。遺物及び図面の整理は平成13・14年度に行った。



第2図 祇園原遺跡周辺地形図(S=1/10000)

第2節 遺跡の層序 (第3図)

この地区の土層は前述したように削平、攪乱をかなり受けており、上部から順序よく層位が見えていくところは少ない。しかし、僅かに残った部分から自然の層位を窺うことができる。

第I層	表土
第II層	黒色土
第III層 a	やや暗い灰黒色土
第III層 b	やや明るい灰黒色土
第IV層	アカホヤの混ざった黒色土
第V層	アカホヤ火山灰層
第VI層	アカホヤのブロックと黒色土
第VII層	黒色土

第3図 基本土層図

第I層は表土で、第II層は粘質の黒色土である。第I層は攪乱土の中に遺物がかなり混ざっているが、第II層からは遺物はほとんど検出されなかった。第III層も黒色土であるが、やや灰色がかっている。僅かな色の違いからa層とb層に分けた。この層からは古墳時代の須恵器の破片が数多く検出された。第IV層は第III層と第V層を繋ぐ漸位層で黒色土の中にアカホヤ火山灰が多少含まれる。第V層はアカホヤ火山灰のブロックの間に黒色土が入り込んだ層でこの上面で遺構を検出した。第VI層は第V層と第VII層の漸位層である。第VII層は黒色土で縄文時代早期の遺物が検出された。

地形は南から北にかけて僅かに傾斜しながら上っており、地層も傾きが見られる。調査区の南端と北端では約2.5mの高度差がある。

この傾きを造成して道路沿いに家が建てられていたため、北側ほど削平が顕著で南にいくほど上層の残りが良い傾向がある。北側ではV層の半分かまたはほとんどを削られていたが、南側ではII層も残っている所も多かった。そのため調査区南側では古墳時代の遺物の包含層であるIII層から須恵器が集中して出土した。

第3節 遺構と遺物 (第4・5・6図)

祇園原遺跡は、台地の西端に近いところにあり古墳も点在するので遺構や遺物がかなり出土するのではないかと予想された。しかし、今回の調査部分は県道脇の細長い部分であり、しかも県道拡幅に伴う用地買収で立ち退いた家屋の基礎の部分かなり入っており、遺物包含層や遺構面が削平されたり攪乱を受けている場所が多かった。

そのため、当初の予想に反して遺構はほとんど検出されなかった。

遺物は縄文時代から古墳時代、近世、近代と出土しているが、古墳時代の土師器・須恵器を除くと、散発的に出土したものが多し。

1 縄文時代の遺物

本遺跡では調査区の北側半分ほどはアカホヤ火山灰層まで削平を受けており、縄文時代前期までの遺物・遺構はほとんど検出されていない。

調査区南側はわずかに包含層が残っている部分も見られ、トレンチからは前期及び早期の土器 (第4

図)が検出された。

縄文時代の遺物としては、早期及び前期の縄文土器が検出された。プライマリーな層から出土したものは少なく、後の時代から攪乱を受けた層の中から出土したものが多く。また、数量的にも数が少なく小片が散発的に検出される状況で、器種が特定できないものも多かった。

その中でA区で設定した数本のトレンチの一つから前期の曾畑式土器の深鉢の一部が数点出土した(22~25)。同じトレンチから早期のものと思われる条痕が施してある土器片(26)も出土したが、器形を特定できるような部位の土器片は検出されなかった。

早期の土器片には貝殻条痕のあるもの(1,2,4)や口縁部が波状の平橋式と思われるもの(10)が出土した。

石器(第5・6図)は12点出土した(1点は表採)。内訳は石鏃1点、石棒1点、石斧3点、石錐1点、剥片6点である。個々の内容については土器観察表(縄文土器)、石器計測表を参照していただきたい。

2 弥生時代の遺物(第7図)

土器が数点出土したが、破片がまばらに散布している状態でしかもすべてが溝の中から出土しており、この時代を把握するまでには至らなかった。甕の破片がほとんどで39~42は同一個体である。

器種別に分類すると

(1) 甕(39,40,41,42,45)

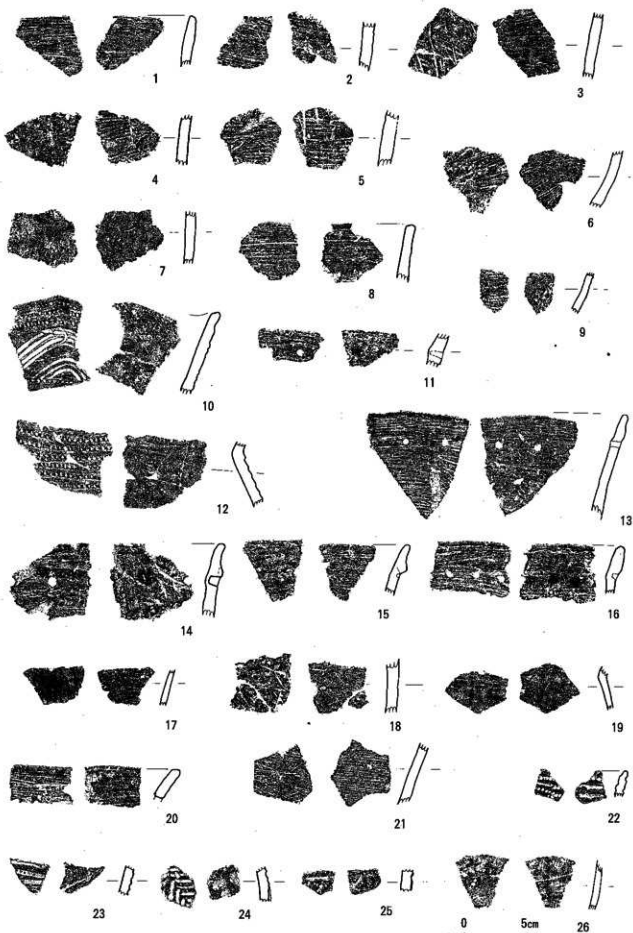
頸部から胴部片(42)

胴部片(39,40,45)

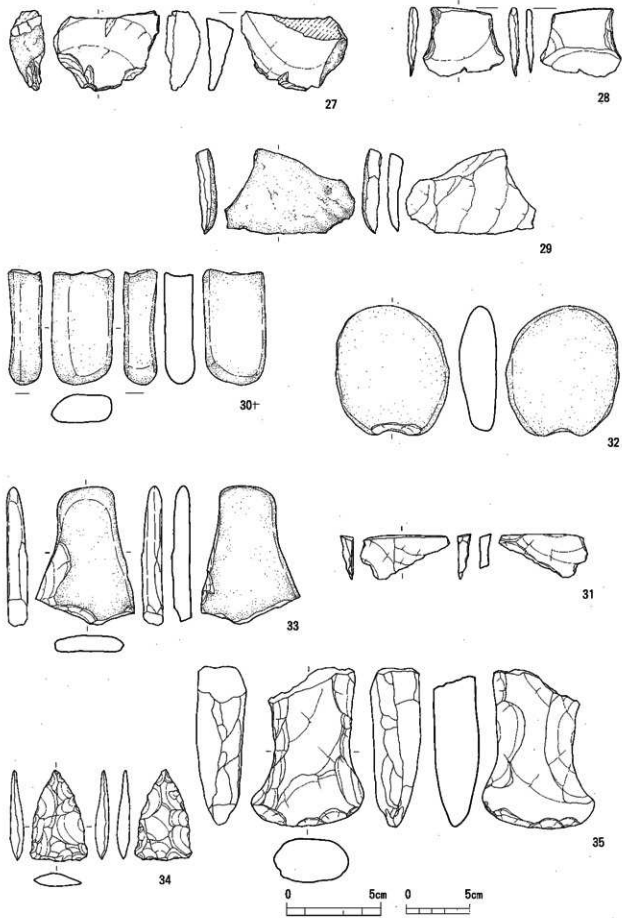
胴部から底部(40)

(2) 鉢(44) 1点のみ。調整は内面がナデ、外面はナデ、ヨコナデ調整で貼付突帯を有する。

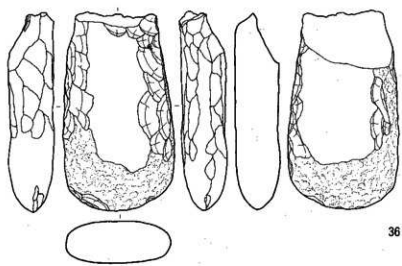
(3) 器種不明(43) 口縁部片で、突帯を有する。



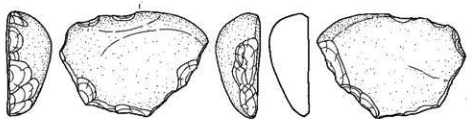
第4図 縄文土器実測図(S=1/3)



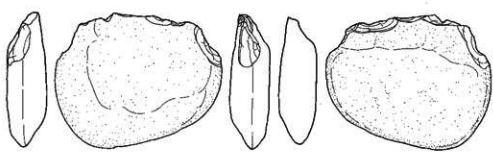
第5图 石器实测图1 (S=1/2 27~29 S=1/3 30~35)



36



37



38



第6圖 石器実測圖2 (S=1/3)

表1 出土遺物観察表(縄文土器1)

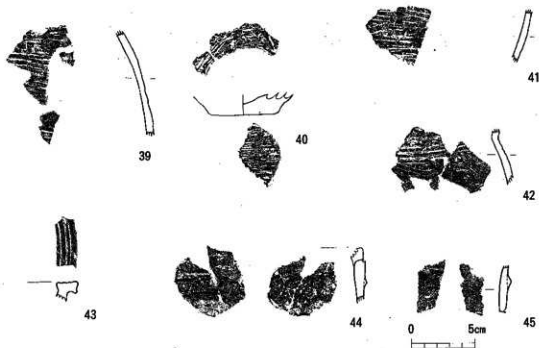
番号	種別	出土位置	器種	部位	口径	底径	高さ	模様・調整		色調		焼成	胎土	備考
								内面	外面	内面	外面			
1	縄文土器	AⅢa-38	深鉢	口縁部				条痕	条痕	暗灰黄	灰黄	良好	繊細な無色透明の粒、微細～3mm大の褐色の砂粒、微細～3mm大の褐色の砂粒、微細～2.5mm大の黄灰色の砂粒	
2	縄文土器	AⅢa-44	深鉢	胴部				貝殻条痕	貝殻条痕	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	繊細な粒、2.5mm大の黒色光沢粒、微細～3mm大の灰褐色の砂粒	
3	縄文土器	AⅢa-22	深鉢	胴部				ヨコナデ	所々へ先端部による斜方向の工具痕、一部黒変	にぶい黄橙	浅黄橙	良好	1.5～4mm大のにぶい褐色の粒、微細～2mm大の灰褐色の粒、微細～1.5mm大のにぶい赤褐色の粒	
4	縄文土器	A-68	深鉢	胴部				やや斜方向の貝殻条痕	ヨコナデ	灰黄	浅黄	良好	0.5～3mm大の灰褐色の砂粒、0.5～2mm大の褐色の砂粒を含む	
5	縄文土器	A-9	深鉢	胴部				横方向の貝殻条痕	横方向の条痕	にぶい黄橙	にぶい橙	良好	1～3.5mm大の褐色の砂粒、微細～1mm大の無色透明な砂粒	
6	縄文土器	AⅢb-52	不明	胴部				横・斜方向のナデ	横・斜方向の強いナデ砂粒の動きあり	灰黄褐	灰黄褐	良好	3mm以下の灰白、明褐、にぶい橙、灰褐色の粒・小片を含む	
7	縄文土器	A-2	深鉢	胴部				ナデ、一部黒変	横・斜方向のナデ、一部に黒変	赤褐、灰褐	にぶい赤褐	良好	微細～2mm大の灰白色の砂粒、微細～1mm大の無色透明、0.5～2mm大の褐色の砂粒を含む	
8	縄文土器	A-21	鉢	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ	浅黄橙	浅黄橙	良好	3mm以下の赤褐色の粒を多く含む。1mm以下の灰褐色の砂粒を含む	
9	縄文土器	トレンチC	深鉢	胴部				ナデ	提糸文による条痕、スズ付着	灰黄褐	にぶい黄褐、黒褐	良好	1mm前後の灰白の褐色の粒、0.5mm以下の透明光沢粒	早期
10	縄文土器	BV2	深鉢	口縁部				ナデ、うす黒変	連続刻目付き微隆起帯、4条の波状比線文、3条の波状比線文、口縁部直下に粘土粒の貼付	にぶい黄褐	にぶい黄褐	良好	1mm以下の灰白色粒、黄褐色粒、透明の光沢粒	口縁部は波状、縄文早期、平鉢
11	縄文土器	A-85	深鉢	口縁部付近				粗いナデ、刺突による凸	粗いヨコナデ、横列の未貫通の穿孔	灰黄	灰黄	良好	微細～1mmの灰白色の砂粒、微細～1mm大の無色透明の砂粒、0.5～2.5mm大の褐・黒褐・橙の砂粒を含む	孔列土器
12	縄文土器	BV3	深鉢	胴部				ナデのちへラミガキ	ナデのちへラミガキ貼付	にぶい黄橙、褐灰	にぶい黄橙	良好	1mm以下の黒褐・灰褐・乳白色粒を多く含む。無色透明の光沢粒を含む	
13	縄文土器	AⅡ-30	深鉢	口縁部				条痕、部分的にナデ	条痕、ナデ、条痕を付した後、一部黒変、連続した穿孔	黄灰、灰黄	灰黄	良好	1.5mm以下のにぶい黄橙・褐灰の粒、1mm以下の灰白の粒、微細な透明光沢粒	孔列土器
14	縄文土器	BSE5	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ、貼付突帯、貼付突帯の後に貫通の穿孔	にぶい橙	浅黄、にぶい橙	良好	1mm前後の灰白、褐灰及び赤褐の粒	孔列土器 縄文晚期
15	縄文土器	AⅢb-46	深鉢	口縁部				ヨコナデ	ヨコナデ、孔列文	にぶい黄橙、灰黄褐	にぶい黄橙	良好	2mm前後の赤褐・灰褐色粒	孔列土器
16	縄文土器	AK溝	深鉢	口縁部				ナデ	ナデ～条痕、規則的な間隔の横列の刺突	浅黄、にぶい黄	にぶい黄褐、灰黄褐	良好	2mm以下の褐灰、灰黄褐の粒、1mm以下の灰白粒・透明・黒色光沢粒	孔列土器

表2 出土遺物観察表(縄文土器2)

番号	種別	出土位置	器種	部位	口径 径	器 高	模様・調整		色調		焼成	胎土	備考
							内面	外面	内面	外面			
17	縄文土器	AⅡa-40	鉢	胴部			ミガキ	ミガキ、一部黒変	におい黄	におい黄褐色	良好	1mm以下の暗赤褐色及び黒色光沢粒	
18	縄文土器	A-7A-8	不明	胴部			ナデ	工具によるナデ	におい黄褐色	浅黄、灰黄褐色	良好	2mm前後の茶褐・乳白色粒を多く含む	
19	縄文土器	AⅡb-92	不明	胴部			ナデ	ミガキ、スス付着	黒褐	褐灰、黒褐	良好	1mm以下の灰褐・黒褐色粒を多く含む黒色・透明の光沢粒	
20	縄文土器	BSE6	甕?	口縁部			貝殻条痕の後へラナデ	貝殻条痕、木貝透の穿孔	精、におい黄褐色	橙	良好	1mm前後の灰白の粒、微細な黒色及び無色透明な光沢粒	縄文晩期
21	縄文土器	AⅡb-53	不明	胴部			板状工具によるナデ	横・斜方向の板状工具によるナデ	灰黄	におい黄褐色	良好	4mm以下のにおい黄褐、灰褐、灰白、橙の粒・小石を含む	
22	縄文土器	トレンチC	鉢	口縁部			ナデ、刺突文	ナデ後横位の貝殻条痕刺突文	におい黄褐色	におい黄褐色	良好	2mm大の浅黄褐・灰白の粒、1mm以下の灰白の粒、0.5mm以下の光沢のある微細粒	前期曾畑式
23	縄文土器	トレンチC	鉢	胴部			ナデ	ナデ後凹線	におい黄褐色	におい黄褐色	良好	2～3mm大の暗灰黄の粒、2mm下の灰白の粒、1mm以下の灰白・浅黄の微細な粒を含む	前期曾畑式
24	縄文土器	トレンチC	不明	胴部			ナデ	区画のある四角形の凹線文、凹線以外の部分はナデ	褐灰	におい赤褐	良好	3mm大の浅黄褐の粒、2mm以下の半透明の微細粒、1mm以下の灰白微細粒を含む	前期曾畑式
25	縄文土器	トレンチC	鉢	胴部			ナデ	ナデ、縦方向に凹線、縦方向の後横方向に凹線	におい黄褐色	におい黄褐色、黒褐	良好	1mm以下の灰白・褐灰及び黒褐の粒、0.5mm以下の透明光沢粒	前期曾畑式
26	縄文土器	トレンチC	不明	不明			ナデ	ナデ	におい黄褐色	褐灰	良好	微細～2mm以内の黒色光沢粒、微細な灰白の粒	

表3 石器計測表

番号	器種	出土位置	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石材	備考
27	剥片	B区	4.2	5.6	1.9	34.5	ホルンフェルツ	
28	剥片	B区	4.5	6.9	1.1	23.7	砂岩	
29	剥片	B区	3.7	4.3	0.6	8.4	ホルンフェルツ	
30	敲石	B区	6.7	1.6	3.3	57.3	砂岩	
31	石斧	B区	10.5	5.9	2.4	238.3	ホルンフェルツ	
32	石錘	B区	6.9	6	2	125.2	砂岩	
33	石斧	A区	8.4	5.9	2.4	137.3	砂岩	
34	石鎌	A区	2.4	1.5	3.5	1	流紋岩	
35	石斧	B区	7.4	5.2	1	50.4	頁岩	
36	剥片	トレンチC	2.4	4.8	6.5	6.4	砂岩	
37	剥片	B区	5.5	7.8		115.4	砂岩	
38	剥片	表採	7.2	8.8	2	179.8	頁岩	



第7図 弥生土器実測図(S=1/3)

表4 出土遺物観察表(弥生土器)

番号	種別	出土位置	器種	部位	口 径	底 高	模様・調整		色調		焼成	結 土	備考
							内面	外面	内面	外面			
39	弥生土器	A.L.溝	甕	胴部			ナデ、斜方 向のナデ	タタキ、一 部タタキの 後ナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	0.5~3mm大のにぶい褐 の粒、0.5~2mm前後の 灰白の粒、1~3mm大の 赤褐の粒	39~42は同 一 個体
40	弥生土器	A.L.溝	甕	底部			ナデ、割離 が日立つ	タタキ、平 行タタキ? 一部赤灰	黄灰、灰黄	にぶい橙、 にぶい黄褐	良好	4mm大の灰黄褐、にぶい 黄褐の小石、3mm大のに ぶい黄褐・灰白・灰黄褐 の小石、2mm以下の灰黄 褐・灰白・黒・褐・橙 の粒を含む	39~42は同 一 個体
41	弥生土器	A.L.溝	甕	胴部			斜方向のナ デ、所々割 離	平行タタキ	にぶい橙	にぶい橙、 褐灰	良好	5mm大のにぶい橙の小石 を含む、4mm以下の黄褐 褐灰、にぶい橙、灰白の 粒・小石を含む	39~42は同 一 個体
42	弥生土器	A.L.溝	甕	胴部~頸部			ナデ、斜方 向のナデ	斜方向のナ デ、タタキ、 タタキの後 のナデ	にぶい橙	にぶい橙	良好	器縁から3mm大の黄灰の 小石、1mmから5mm大の 赤褐の粒、1mm前後の灰白 の粒を含む	39~42は同 一 個体
43	弥生土器	A.L.溝	不明	口縁部			回転ナデ	回転ナデ	にぶい橙	橙、にぶい 褐	良好	1mm以下の灰白・黒褐・ 赤褐の粒	
44	弥生土器	A.N.溝4 8,49	鉢	口縁部			ナデ	ナデ、貼付 突帯、ヨコ ナデ	にぶい黄褐	灰黄褐	良好	0.5~3mm大の褐色の砂 粒、0.5~2mm大の黒褐 色の粒、0.5~1mm大の 灰白の砂粒を含む	
45	弥生土器	A.溝	甕	胴部			ナデ	ナデ、貼付 突帯、刺突	黒褐	にぶい褐	良好	1mm前後の灰褐・褐灰の 粒、0.5mm以下の黒色光 沢粒、無色透明の鉱物粒	

3 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物については、A区Qグリッドの拡張部を中心に土師器・須恵器が多数検出した。この部分は遺物が集中して出土した（第8図参照）。大部分は須恵器である。この部分から10mほどのところに祇園原95号墳があり、古墳と関連した遺構を伴う可能性が大きかったが、遺構は検出することができなかった。

しかし、須恵器を中心とした遺物の分布状況をみると、第8図で示されたように遺物の密な部分と疎な部分との差がはっきりしており、密な部分は弧を描くように分布している。

東側の部分がかかなり削平されていることと、西側は調査区外まで遺物の密な部分が続いており、全体的な把握は難しいが、今回の出土状況を見る限りは開発等により消滅した古墳の周溝の底の部分を検出した可能性もある。

土師器（第9図）

土師器は須恵器と共にSZ1から出土したものがほとんどである。いずれも破片のみで完形のものはなく、風化しているものもかなりあった。

土師器を器形で分類すると、碗1、壺3、鉢1、甕2、高坏1、器種不明1である。

細かく分けると次のようになる

(1) 壺 52、53、47、

部位はすべて胴部である。調整はすべてヨコナデが施しており、2は外面にススが付着、12は外面に指押さえが一部みられる。

(2) 甕 50、54

・口縁部 50

・胴部 54

ナデで調整されている。

(3) 高坏 46

坏部～脚部

調整はミガキの後ナデが施しており、外面に指押さえがみられる。

(4) 碗 49

口縁部から胴部 調整は内外面ともにヨコナデが施しており、外面は一部黒変している。

(5) 鉢 51

1点のみ出土。部位は胴部から底部付近。調整は内面はナデ・斜方向のナデ、外面はヨコナデが施しており、ススの不着が見られる。

(6) 器種不明 48 口縁部 調整は縦・斜方向のナデが見られる。

須恵器（第10図）

須恵器は壺・坏（身・蓋）・高坏・甕等が出土した。個体数としては坏が多い。

各個体の胎土や焼成については遺物観察表を参照していただきたい。

観察表には55から69まで15点掲載している。

甕が1点出土したが(57)、内面、外面とも回転ナデがみられ、外面底部付近では一部上方向へのナデがみられる。上部は風化が著しく調整は不明である。内面底部付近、頸部付け根付近では指頭痕もみら

れる。口縁部の径が胴部の径よりも小さく、推定口径約8.6cm、器高約12cmでTK23相当で、5世紀後半から6世紀初頭と思われる。

58は高坏の裾部で内面、外面とも回転ナデで成形され、縦方向の透かしがみられる。裾部の推定径は約10.6cmである。

59は、高坏の坏部から脚部の一部で坏部は回転ヘラケズリ、回転ナデで成形し、坏部中央付近に貼付突帯、その下に櫛描波状文を施している。脚部は僅かにしか残存していないが、脚部に4つの透かしが見られる。これらの様式からこの高坏は田辺昭三氏の編年によるTK208からTK23と思われる。

60から68は坏（身及び蓋）である。

60は坏身で回転ナデ、回転ヘラケズリでの成形、口径は約12.8cm、器高約4.2cmで施文はみられない。受部の幅はやや広く、たちあがりは内向している。

64は坏蓋でヘラケズリ、回転ナデで成形されている。稜があり、直立に近い形でわずかに外反している。天井部につまみはついていない。推定口径は約12.8cm、器高は約4.8cmである。

61は坏身でヘラケズリと回転ナデで成形されている。受部はやや広くたちあがりは内向し、外にカーブを描きながら口唇部で直立している。推定口径は約9.7cmである。底部が欠損しているので器高は推定できない。

62は坏身でヘラケズリと回転ナデで成形されている。受部が8mmほどあり、広い。たちあがりは内向している。口径は約10.6cm、器高は約4.3cmである。

63は坏身で、底部はケズリ、受部とたちあがりは回転ナデ、内面は底部まで回転ナデで成形されている。受部は幅が5mm前後でたちあがりは先端が欠損しているが、内向している。反転復元した受け部の推定の径は約12.4cmである。

64は坏身であり、内面と受け部付近は回転ナデ、外面底部付近はケズリで成形されている。受け部の幅は5mm前後でたちあがりは付け根から欠損しているが、断面の状況から内向していたものと考えられる。

65は坏身で、回転ヘラケズリと回転ナデで成形されている。稜から口縁部までが深くわずかに外反している。天井部が欠損しており、つまみの有無は確認できない。反転復元での推定口径は約10.2cmである。

66は坏蓋で回転ヘラケズリとナデで成形されている。稜は見られず、器高は約2.6cm、口径は約14.6cmである。やや薄い坏蓋である。

67は坏蓋である。回転ヘラケズリと回転ナデで成形されている。稜は見られない。天井部中央が欠損しており、つまみがあったかどうかは不明である。器高は約2.6cm、口径は約13.2cmであり、やや薄い。

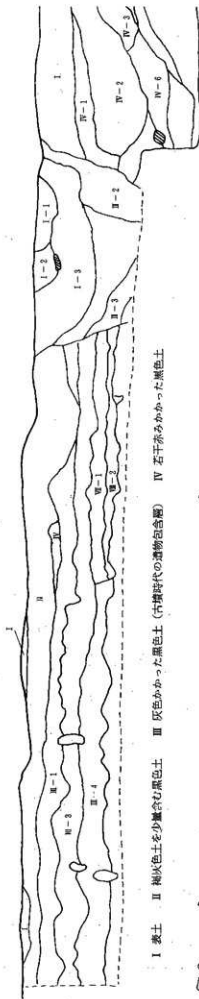
68は坏身で、底部はケズリ、受け部付近とたちあがり、内面は回転ナデで成形されている。受け部からたちあがりは63とほぼ同じ形状であるが、底部が63が深いのに対し68は浅くなっている点が異なる。坏蓋である。

70は坏蓋の底部の一部と思われる。

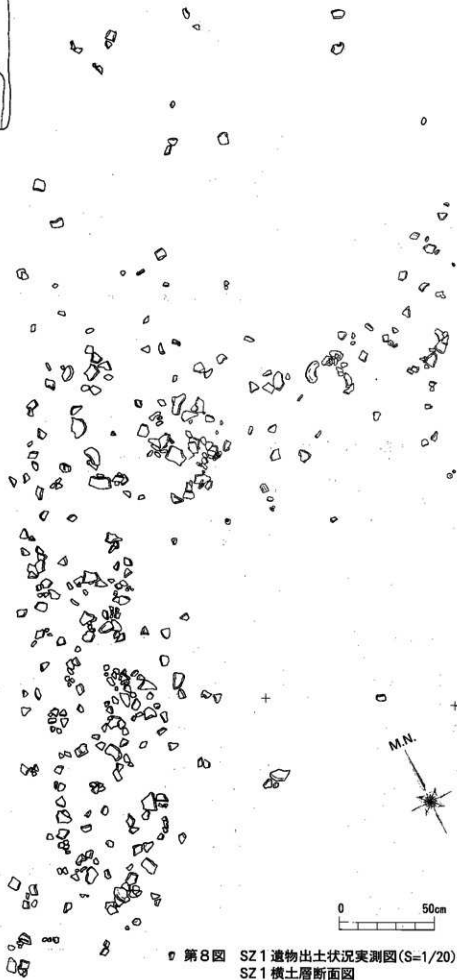
以上の須恵器はTK208～TK216相当で、5世紀後半から6世紀にかけてのものがほとんどである。

A区西壁 Qグリッド

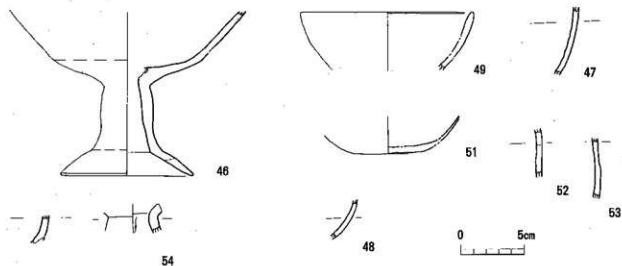
—— 74.00m



I 表土 II 褐色土を少量含む黒色土 III 灰色かかった黒色土 (古墳時代の遺物を含む層) IV 若干赤みかかった黒色土



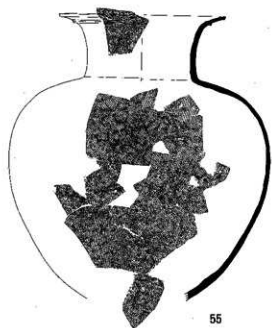
第8図 SZ1 遺物出土状況実測図 (S=1/20)
SZ1 横土層断面図



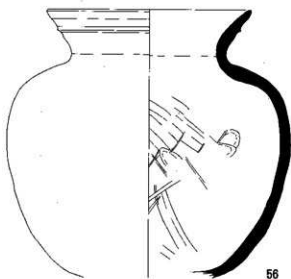
第9図 古墳時代の土器(土師器)(S=1/3)

表5 出土遺物観察表(土師器)

番号	種別	出土位置	器種	部位	口 径	底 径	器 高	模 様・割 整		色 調		焼成	胎 土	備考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
46	土師器	SZ1-58, 6, 1, 64, 65, 77	高環	環部~脚 部				環部: ミガ キの後ナデ 一部黒変 脚部: 横方 向に指ナデ ナデ	ミガキの後 ナデ	橙	橙	良好	1mm以下の黒褐・茶褐・灰褐色の 砂粒を含む	残存約1/2
47	土師器	SZ1-53	壺	胴部				ヨコナデ	ヨコナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	微細~1.5mm大の赤褐・褐色の砂 粒、微細~1mm大の灰白色・無 色透明・黒色の光沢のある粒を 含む	
48	土師器	AT5	不明	胴部				ナデ、粘上 の紋りが見 られる	縦・斜方向 のナデ、縦 方向のナデ	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	微細~0.5mm大の黒褐・灰白色・ 無色透明の砂粒を含む	
49	土師器	SZ1-42	碗	口縁部~ 脚部				ヨコナデ	ヨコナデ、 黒変?	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	2mm以下の褐色の粒	口径残存 約1/4
50	土師器	SZ1-42	壺	口縁部				風化著しく 調整不明、 花ナデが 見られる	風化著しく 調整不明	橙、にぶい 橙	橙、にぶい 橙	良好	3mm以下の橙・明褐・褐灰・灰 白色の砂粒、無色透明の粒を含 む	
51	土師器	SZ1-62、 66, AT5	鉢	脚部~底 部付近				ナデ、斜方 向のナデ	ヨコナデ、 一部スス付 着	にぶい黄橙	にぶい黄橙	良好	微細~2mm大の褐灰色の粒、微 細~2.5mm大の灰褐色の粒、微 細~1mm大の黒色の粒	
52	土師器	SZ1-140 142, 205, 210, 213	壺	胴部				ヨコナデ、 横方向に一 部強いヨコ ナデ	ヨコナデ、 一部スス付 着	浅黄橙、褐 灰	浅黄橙、褐 灰	良好	微細な鈍色透明・黒色鏡光沢の 粒、微細~5mm大の灰褐色の粒 微細~3.5mm大の褐灰色の粒	
53	土師器	SZ1-344	壺	胴部				ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	4mm前後の灰褐・茶褐色の粒を 多く含む	
54	土師器	SZ-315	高環	脚部				ナデ	ナデ	橙	にぶい黄橙	良好	4mm前後の灰褐・茶褐色の粒を 多く含む	



55



56



57



58



59



64



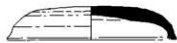
60



65



61



66



62



67



63



68



69

第10図 古墳時代の土器(須恵器)(S=1/3)



表6 出土遺物観察表(須恵器1)

番号	種別	出土位置	器種	部位	口径	底径	器高	模様・刺莖		色調		焼成	胎土	備考
								内面	外面	内面	外面			
55	須恵器	SZ1	甕	頸部				ヨコナデ、指頭による横方向の強いナデ、自然軸付着	ヨコナデ、自然軸付着	黄灰、灰オリブ	黒褐	精良	微細～1mm大の灰白色の砂粒、0.5～1.5mm大の褐鉄鉱粒を含む	
	須恵器	SZ1	甕	頸部				ヨコナデ、指頭による横方向の強いナデ、自然軸付着	ヨコナデ、自然軸付着	オリブ出	黒褐	精良	微細～3mm大の灰白色の砂粒、0.5～1.5mm大の褐鉄鉱粒を含む	
	須恵器	SZ1	甕	頸部～肩部				ヨコナデ、縦・やや斜方向の硬格子目タタキ	ヨコナデ、自然軸付着	オリブ、黒、灰	黄灰	精良	微細～2mm大の灰白色の砂粒、0.5～1.5mm大の褐鉄鉱粒を含む	
56	須恵器	SZ1	壺	口縁部～頸部	16.2			回転ナデ	回転ナデ、貼付突帯	褐灰、灰オリブ	灰赤、褐灰	やや軟	微細な灰白及び透明光沢粒を含む	
	須恵器	SZ1	壺	胴部				丁具によるナデ後一部指ナデ、指押さえ	ナデ	褐灰、灰オリブ	灰赤、褐灰、灰黄	精良	微細な灰白及び透明光沢粒を含む	
	須恵器	SZ1	壺	頸部～胴部				回転ナデ、指頭痕	回転ナデ	褐灰、灰オリブ	灰赤、褐灰	やや軟	微細な灰白及び透明光沢粒を含む	
57	須恵器	SZ1	甕	口縁部～底部	8.55	12.0		回転ナデ、指押え	回転ナデ、一部上方向にナデ	黄灰、浅黄	黄灰、浅黄	精良	微細な灰白及び透明光沢粒を含む	合成復元
58	須恵器	A-81	高坏	裾部		10.6		回転ナデ、透かし	自然軸付帯縦方向の透かし、回転ナデ	灰黄	灰、灰オリブ	堅微	微細～0.5mm大の灰白色の砂粒を含む	
59	須恵器	SZ1	高坏	林部				風化のため自然軸剥離	ナデ、回転ナデ	褐灰	灰	堅微	精良	反転復元
	須恵器	SZ1	高坏	環部～胴部	17.2			ナデ	回転ナデ、貼付突帯、瓣播状文、回転ヘラケズリ	灰、褐灰	灰	堅微	精良	反転復元
60	須恵器	SZ1	環(身)	口縁部～底部	10.7	4.2		ナデ、回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ、ナデ	黄灰	黄灰	堅微	精白、2mm以下の灰白色の粒を含む	反転復元
61	須恵器	SZ1	環(身)	口縁部～底部	9.7			回転ナデ	ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ	灰黄褐	灰黄褐、浅黄	堅微	4mmの黄灰、灰白色の粒を含む	反転復元
62	須恵器	SZ1	環(身)	口縁部～底部	10.6	9	4.3	回転ナデ	ナデ、回転ナデ、ヘラケズリ	灰	灰	堅微	5mm大の灰白色の小石、4mm大の灰黄褐の小石を含む。1mm以下の灰口、にぶい黄褐の粒を含む	反転復元
63	須恵器	SZ1	環(身)	受け部～底部				回転ナデ	回転ナデ、回転ヘラケズリ	黄灰	黄灰	堅微	1mm前後の灰白、褐、褐灰の粒を含む	反転復元
64	須恵器	SZ1	環(身)	口縁部～底部	12.8		4.8	回転ナデ	回転ナデ、ヘラケズリ、部削りの後ナデ	灰、黄灰	灰、灰黄	堅微	精良、3mm大の灰白色の粒、1mm以下の灰白、褐灰及び出隅の粒を含む	堅微
65	須恵器	SZ1	環(身)					回転ナデ	回転ナデ、ケズリ	灰	灰	堅微	0.5mm以下の灰白、赤褐及び褐灰の粒、0.5mm以下の透明光沢粒を含む	
66	須恵器	SZ1	環(蓋)					回転ヘラケズリの後ナデ	ナデ、回転ヘラケズリ	灰	灰	堅微		反転復元
67	須恵器	SZ1	環(蓋)					回転ナデ	ナデ、回転ヘラケズリ	黄灰	黄灰	堅微		反転復元

表7 出土遺物観察表(須恵器2)

番号	種別	出土位置	器種	部位	口 径	底 径	器 高	模様・調整		色 調		焼成	胎 土	備考
								内 面	外 面	内 面	外 面			
68	須恵器	SZ1	坏(蓋)	口縁部				回転ナデ	回転ナデ、 回転ヘラケ ズリ	灰	黄灰	堅微	1mm以下の灰白色の粒	反転復元
69	須恵器	SZ1	坏(身)	受け部～ 底部付近				回転ナデ	回転ナデ、 ズリ	灰	灰	堅微	精良、0.5mm以下の灰白 の粒を含む	反転復元

第4節 近世・近代の遺物(第11図)

近世から近代にかけての陶磁器類が検出された。出土位置はB区が多く、A区は溝の中から出土した
ものが多い。

分類は薩摩焼き、白磁の「くらわんか」碗、肥前系白磁、その他の4種に分類した。

1 薩摩焼

(1) 苗代川系 73,74,75,80

(2) その他 79,81,89

(1)は19世紀の製造とおもわれる。破片のみで完形はなかったが、すべて土瓶である。

2 「くらわんか」碗 78,82,87

白磁でいずれも18世紀後半から19世紀にかけての碗である。

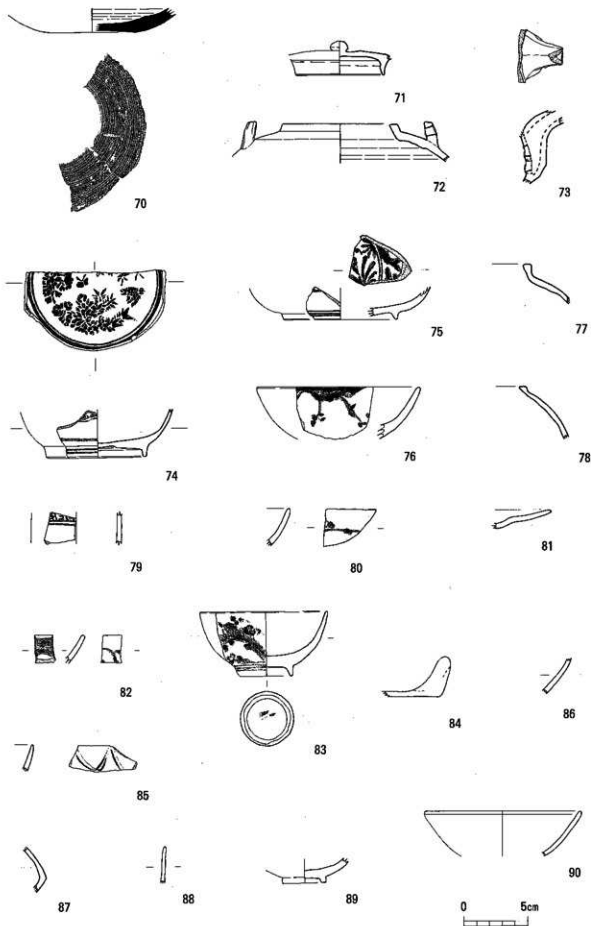
3 肥前系白磁 77,84

2点とも皿で、77は染め付けが施され、84は草花文が施されている。

4 その他、70,76,83,85,86,88,90

76は陶器の碗、83は陶器の皿で、84は焙烙である。88,90は碗である。70の底部にはカキ目が施
してある。

陶磁器類はいずれも遺構を伴わず、破片が散布した状態で検出された。



第11図 近世の遺物(陶磁器)(S=1/3)

表B 遺物観察表(陶磁器)

番号	種別	出土地位置	器種	部位	口径	底径	器高	模様・調整		色調		焼成	胎土	備考
								内面	外面	内面	外面			
70	陶磁器	B区	碗	胴部～底部	7.6			カキ目、施釉	施釉	灰白	灰白	堅微	精良	
71	陶磁器	B区	土瓶	蓋	6.9			回転ナデ、工具痕	施釉、同心門伏の釉の付着	暗灰黄	オリーブ黒	堅微	精良	薩摩焼 兩代川系? 19C?
72	陶磁器	AL溝	上瓶	口縁部～胴部				施釉、回転ナデ	施釉	オリーブ黒	オリーブ黒	堅微	精良、微細～1mm程度の灰白の粒を含む	薩摩焼 19C
73	陶磁器	B区	土瓶	注口				ナデ	施釉、スス付着	暗褐	暗褐	堅微	精良	薩摩焼 山代川系? 19C?
74	陶磁器	AQ溝	碗	胴部～底部	7.6			カキ目、施釉	施釉	灰白	灰白	堅微	精良	陶器
75	陶磁器	B区	皿	口縁部～底部	8.8			施釉	施釉、染め付け	明緑灰	明緑灰	堅微	精良	肥前系 18C後半
76	陶磁器	B区	碗	口縁部～底部	13			施釉	施釉、染め付け	明オリーブ灰	明オリーブ灰	堅微	精良	白磁、「くらわんか」製
77	陶磁器	AL溝	土瓶	胴部				回転ナデ、部分的に自然釉あり	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	堅微	精良	薩摩焼 19C
78	陶磁器	B区	上瓶	胴部				ナデ、一部施釉	ナデ、露胎、施釉	にぶい黄褐	にぶい黄褐	堅微	精良	薩摩焼 山代川系? 19C?
79	陶磁器	B区	土瓶	口縁部～胴部	9			回転ナデ、部分的に施釉有り	ナデ、施釉	オリーブ黒	オリーブ黒	堅微	精良	薩摩焼 19C
80	陶磁器	B区	碗	口縁部～胴部				施釉	施釉、染め付け(草花文)	灰白	灰白	堅微	精良	白磁、「くらわんか」製 18C
81	陶磁器	AQ溝	皿	口縁部				施釉貫入	施釉貫入	灰白	灰白	堅微	精良	陶器、瀬戸 美濃?
82	陶磁器	AQ13	皿	口縁部				施釉	施釉、唐草文	灰白	灰白	堅微	精良	白磁 肥前系 18C後半
83	陶磁器	B区	碗	口縁部～底部	10.1	4.1	5.1	施釉	施釉、染め付け					
84	陶磁器	B区	片持	口縁部～底部				回転ナデ	ナデ、スス付着	にぶい黄褐	灰黄褐	堅微	精良	黄褐色な灰白の粒を含む
85	陶磁器	B区	丸碗	口縁部～胴部				施釉	施釉、染め付け(二重網目文)	灰白	灰	堅微	精良	白磁、「くらわんか」製 18C後半～ 19C
86	陶磁器	B区	碗	胴部				施釉	施釉	暗オリーブ	暗オリーブ	堅微	精良	
87	陶磁器	AL溝	土瓶	胴部				回転ナデ、部分的に自然釉あり	施釉	灰オリーブ	灰オリーブ	堅微	精良	薩摩焼 19C
88	陶磁器	B区	碗	口縁部				施釉貫入	施釉、貫入有り	灰白	灰白	堅微	精良	関西系 18C
89	陶磁器	B区	碗	底部		3.4		施釉、貫入有り	施釉、貫入有り	灰白	灰白	堅微	精良	
90	陶磁器	B区	碗	口縁部～胴部				施釉	施釉	暗オリーブ	オリーブ黒、灰オリーブ	堅微		

第4節 自然科学分析の結果（土層とテフラ）

1. はじめに

宮崎県域に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、始良、桜島、鬼界、霧島、阿蘇など、多くの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、年代の不明な土層や遺構が検出された祇園原遺跡においても、地質調査を行って土層の層序を記載するとともに、採取された試料を対象にテフラ検出分析と屈折率測定を行って示標テフラの層位を把握し、土層や遺構の年代に関する資料を収集することになった。調査分析の対象となった地点は、Bグリッド深掘地点、Aグリッド東壁、Mグリッド南地点、Mグリッド北地点、FグリッドSE1（Cセクション）、QグリッドA区SE1の6地点である。

2. 土層の層序

(1) Bグリッド深掘地点

Bグリッド深掘地点では、下位より褐色砂質土（層厚5cm以上）、成層したテフラ層（層厚78cm）、灰褐色土（層厚24cm）、褐色土（層厚14cm）、暗灰褐色土（層厚31cm）、黄色軽石混じり暗灰褐色土（層厚25cm、軽石の最大径5mm）、灰褐色土（層厚13cm）、暗灰褐色土（層厚17cm）、黒褐色土（層厚13cm）が認められる（図1）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より黄色粗粒火山灰層（層厚1cm）、橙色細粒火山灰層（層厚2cm）、かすかに成層した黄色粗粒火山灰層（層厚33cm）、褐色細粒火山灰層（層厚10cm）、黄色粗粒火山灰層（層厚9cm）、橙色砂質細粒火山灰層（層厚3cm）、黄橙色軽石混じり黄色粗粒火山灰層（層厚20cm、軽石の最大径4mm）から構成されている。このテフラ層は、その層相から、約2.4～2.5万年前*1に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰（AT、町田・新井、1976、1992、松本ほか、1987、池田ほか、1995）とその一連のテフラと考えられる。この上位の暗灰褐色土に含まれる黄色軽石については、その岩相から約1.4～1.6万年前*1に霧島火山から噴出した霧島小林軽石（Kr-Kb、伊田ほか、1956、町田・新井、1992、早田、1997）に由来すると考えられる。

(2) Aグリッド東壁

Aグリッド東壁では、盛上の下位に、下位より黒褐色土（層厚8cm以上）、黒色土（層厚13cm）、橙色軽石や褐色火山豆石を多く含む黒褐色土（層厚2cm、軽石の最大径2mm、火山豆石の最大径2mm）、橙褐色土（層厚11cm）が認められる（図2）。これらのうち、黒褐色土に含まれる橙色軽石や褐色火山豆石は、その特徴から約6,300年前*1に鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah、町田・新井、1978）の基底部の構成層に由来すると考えられる。この地点では、このK-Ahの下位の黒色土から、縄文時代の遺物が検出されている。

(3) Mグリッド南地点

Mグリッド南地点では、本遺跡の表層部の基本土層断面を観察することができた。ここでは、下位より橙色細粒火山灰層（層厚3cm以上）、褐色土（層厚6cm）、暗灰褐色土（層厚8cm）、黒色土（層厚13cm）、暗灰褐色土（層厚11cm）、暗褐色表土（層厚13cm）が認められる（図3）。これらのうち、橙色細

粒火山灰層は、層相からK-Ahの主体部に相当する。

(4) Mグリッド北地点

Mグリッド北地点では、下位より褐色土(層厚3cm以上)、暗灰褐色土(層厚8cm)、黒色土(層厚14cm)、黒灰褐色土(層厚8cm)、暗灰褐色土(層厚5cm)、暗褐色表土(層厚19cm)が認められる(図4)。

(5) FグリッドSE1(Cセクション)

FグリッドのSE1(Cセクション)の覆土は、下位より褐色土ブロックを含む暗灰褐色土(層厚4cm)、暗灰褐色土(層厚9cm)、黒褐色土(層厚8cm)、黒色土(層厚4cm)、暗灰褐色土(層厚14cm)からなる(図5)。

(6) QグリッドA区SE1

QグリッドA区のSE1の覆土は、下位より色調がより暗い暗灰褐色土(層厚33cm)、暗灰褐色土(層厚8cm)、灰褐色土ブロック混じり暗灰褐色土(層厚21cm)、灰褐色土ブロックに富む暗灰褐色土(層厚5cm)、褐色土ブロック混じり暗褐色土(層厚12cm)、暗灰褐色土(層厚20cm)が認められる(図6)。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

Aグリッド東壁、Mグリッド南地点、Mグリッド北地点、FグリッドSE1(Cセクション)、QグリッドA区SE1の5地点において、基本的に厚さ5cmごとに採取された試料のうち、48点を対象にテフラ検出分析を行い、示標テフラの降灰層準の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料15gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 分析篩により、1/4-1/8mmの粒子を篩別。
- 5) 実体顕微鏡によりテフラ粒子の特徴や量を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。Aグリッド東壁では、軽石やスコリアは検出されなかった(試料3に関しては、軽石が非常によく発泡しているために処理中に消失)。火山ガラスとしては、試料2や試料1にK-Ahに由来する多くの淡褐色や無色透明のバブル型ガラスが認められる。

Mグリッド南地点では、試料9に細粒の白色軽石(最大径1.2mm)がごく少量含まれている。試料5以上には、褐色スコリア(最大径1.3mm)が多く含まれている。また試料5や3には、ほかに発泡のあまり良くない灰色軽石(最大径3.1mm)が認められる。したがって、この地点では、試料5付近に褐色スコリアで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。また、Mグリッド北地点では、試料7や試料6に褐色スコリア(最大径1.3mm)が多く含まれている。これらの試料には、ほかに発泡のあまり良くない灰色軽石(最大径4.0mm)も認められる。したがって、この地点では、試料7付近に褐色スコリアで特徴づけられるテフラの降灰層準があると考えられる。

FグリッドSE1(Cセクション)では、いずれの試料からも褐色スコリア(最大径2.2mm)を検出することができた。QグリッドA区SE1でも、いずれの試料からも褐色スコリア(最大径2.2mm)を検出することができた。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

遺物包含層の年代や検出されたテフラ粒子の起源を明らかにするために、Aグリッド東壁の試料5およびMグリッド南地点の試料9の2点について、温度一定型屈折率測定法(新井、1972、1993)により屈折率の測定を行うことになった。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。Aグリッド東壁の試料5に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.509-1.511である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.705-1.708である。またMグリッド南地点の試料9に含まれる火山ガラス(n)の屈折率は、1.509-1.513である。重鉱物としては、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.706-1.730(modal range: 1.706-1.708)である。

5. 考察—示標テフラとの同定と遺構との層位関係について

屈折率測定の対象となったAグリッド東壁の試料5とMグリッド南地点の試料9に含まれる火山ガラスは、その特徴からK-Ahに由来すると考えられる。Aグリッド東壁の試料5に含まれるテフラについては、斜方輝石や単斜輝石が多く含まれていることや、霧島火山や桜島火山に由来するテフラ粒子が混在している可能性が考えられる。ただし完新世に噴出し、K-Ahの下位にあるテフラの中には、屈折率(γ)が1.705-1.708のテフラは知られていない。強いて似たテフラをあげるとすると、Kr-Kbのそれが一致する。以上のことから、この試料には、多くのテフラに由来する粒子が混在している可能性が高いと思われる。

またMグリッド南地点の試料9に含まれるテフラ粒子のうち、斜方輝石の中には、非常に屈折率が高いものが認められる。この斜方輝石については、その屈折率からATに由来する可能性と、約4,200年前*1に霧島火山御池火口から噴出した霧島御池テフラ(Kr-M、町田・新井、1992、早田、1997)に由来する可能性が考えられる。層位から後者の可能性も非常に高い。もしKr-M起源の粒子であれば、今後宮崎平野における縄文時代の編年研究にとって重要な発見となる。より堆積状況の良い地点において、今後検証を行う必要がある。

Mグリッド南地点の試料5付近、Mグリッド北地点の試料7付近に降灰層準があると考えられる褐色スコリアは、その特徴から10~13世紀に霧島火山群高千穂火山から噴出した霧島高原スコリア(Kr-THS、井ノ上、1988、早田、1997*2)と考えられる。その産状から、FグリッドSE1(Cセクション)およびQグリッドA区SE1のいずれについても、その層位はKr-THSより上位の可能性が考えられる。

6. 小結

祇園原遺跡において、地質調査、テフラ検出分析、屈折率測定を行った。その結果、下位より始良Tn火山灰(AT、約2.4~2.5万年前*1)、霧島小林軽石(Kr-Kb、約1.4~1.6万年前*1)、鬼界アカホヤ火山灰(約6,300年前*1)、霧島高原スコリア(Kr-THS、10~13世紀)などの示標テフラのほか、霧島御池テフラ(Kr-M、約4,200年前*1)に由来する可能性をもつテフラ粒子を検出することができた。

*1 放射性炭素 (14C) 年代.

文献

- 新井房夫 (1972) 斜方輝石・角閃石の屈折率によるテフラの同定—テフロクロロジーの基礎的研究. 第四紀研究, 11, p.254-269.
- 新井房夫 (1993) 温度一定型屈折率測定法. 日本第四紀学会編「第四紀試料分析法—研究対象別分析法」, p.138-148.
- 伊田一善・本島公司・安國 昇 (1956) 宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告. 地調報告, 168, p.1-4.
- 池田晃子・奥野 充・中村俊夫・筒井正明・小林哲夫 (1995) 南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器質量分析法による14C年代. 第四紀研究, 34, p.377-379.
- 井ノ上幸造 (1988) 霧島火山群高千穂複合火山の噴火活動史. 岩鉱, 83, p.26-41.
- 町田 洋・新井房夫 (1976) 広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義. 科学, 46, p.339-347.
- 町田 洋・新井房夫 (1978) 南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰. 第四紀研究, 17, p.143-163.
- 町田 洋・新井房夫 (1992) 火山灰アトラス. 東京大学出版会, 276p.
- 松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗 (1987) 始良Tn火山灰 (AT) の14C年代. 第四紀研究, 26, p.79-83.
- 早田 勉 (1997) 風上と自然環境. 宮崎県史通史編, p.3-77.

第5節 まとめ

本遺跡は祇園原古墳群の中の西よりの部分を南北に長さ300mにわたって横切る細長い調査区であったが、遺構は明確には確認されなかった。しかし調査区南側には古墳時代の土師器・須恵器を中心に集中的に出土した地点がある。95号墳に隣接する場所であり、何らかの遺構に付随するものと考えて調査したが残念ながら平面的にも断面的にも遺構と思われるものは検出することができなかった。しかし土の状態は攪乱等を受けていないことなどからこの遺物の集中区を不明遺構（SZ1）として取り扱った。

SZ1出土の遺物、特に須恵器については坏身・坏蓋の様式等からみてTK216からTK208あたりの比較的古い型式のものであり、以前近くで調査の行われた祇園原地区遺跡で出土したMT15からTK209あたりに比べても、やや古い時代の型式のものが出土している。

東に祇園原古墳群の大型の前方後円墳である大久保塚（92号墳）が近接しており、この古墳と何らかの関連があることも考えられる。

他の時代のもは調査区が道路拡張に伴う人家の跡のため、家の基礎や排水路等がかなり深いところまで入っていたり、整地のために遺物の包含層が削平されていたりしていたためその影響を免れた部分的な面でしか遺物の検出を行うことができず、遺跡全体の性格を見いだせなかったのは残念であった。

しかし、上述の古墳時代の須恵器が出土したことで、祇園原古墳群の時代背景の解明に何らかの影響を与える資料となるのではないかとと思われる。

図版1 調査区



調査区全景



A区南側



B区中央付近



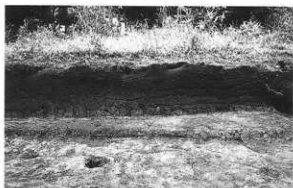
A区Ⅲ層b上面



B区北側



SZ-1 完掘状況

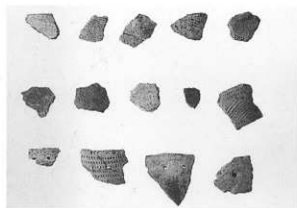


SZ-1 拡張部分土層断面



SZ-1 遺物出土状況

図版2 遺物



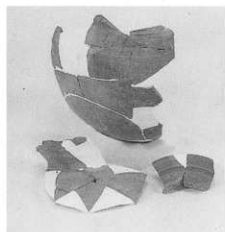
出土した縄文土器



出土した石器



須恵器(甕)



須恵器(壺)



須恵器(甕)



須恵器(坏蓋)



須恵器(坏蓋)



須恵器(坏身)

第三章 春日地区遺跡第2地点の調査

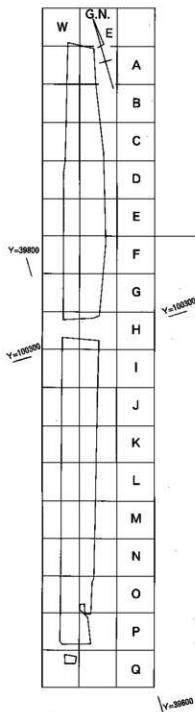
第1節 調査の経過

春日地区遺跡第2地点の調査対象地は、道路拡幅部1,498㎡である。調査区を東西に横切る農道が走る。調査対象地のうち、この農道より便宜的に北側をA区(704㎡)南側をB区(654㎡)B区の南側への拡張区C区(40㎡)とした(第2図参照)。現地での記録図面作成のため、国上座標(XY座標)に乗じた10mグリッドを設置した(図1参照)。

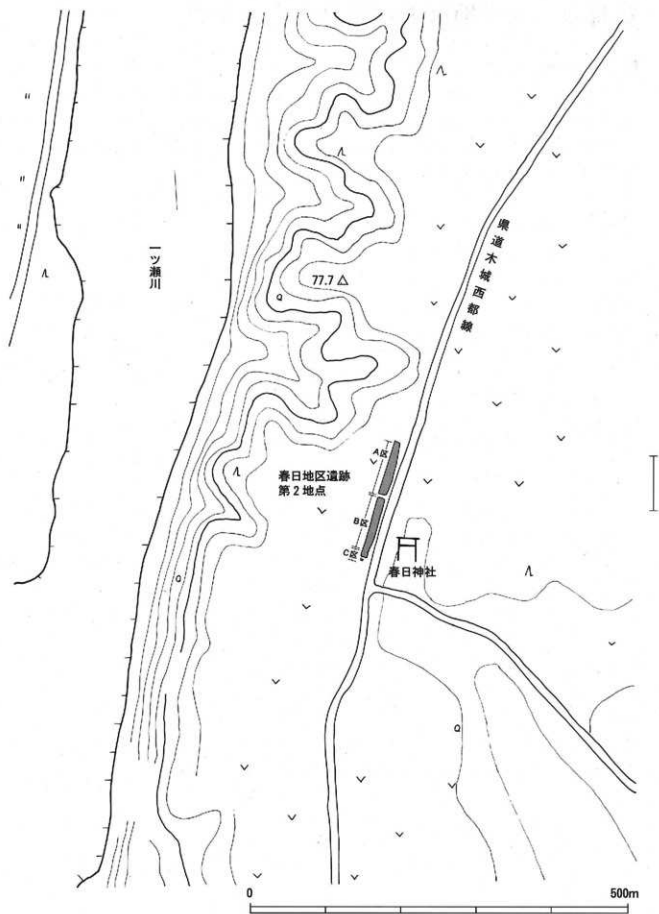
A区では先ず重機により表土を除去した。調査区南部でII層を確認した。北半分ではIV層まで削平されていた。精査後トレンチを10か所設定した。その結果VI層以下では遺物・遺構とも確認されなかった。そこで調査区南部に残存するII・III層、調査区北半分のV層に限定して調査を行った。調査区は、圃場整備によりかなり削平を受けていた。また層の残存状況から元来起伏が激しい地形であったことが予想された。V層掘り下げ時、調査区北部よりピット群、調査区中央部より溝状遺構3条・縄文時代早期の集石遺構1基が確認された。また南半分のII～III層からは縄文時代後期・晩期の土器・石器・礫が大量に出土した。アカホヤ火山灰層上面での平面地形測量・土層観察により埋没した谷地形への流れ込みであることを確認した。付近の集落からの廃棄・転落の可能性が指摘された。

B区では先ず重機により表土を除去した。圃場整備により調査区全体でIV層までが削平されていた。そこでV層の掘り下げを行った。その結果縄文時代後期の隅丸方形のプランを持つ竪穴住居1基・ピット群・土坑1基、縄文時代早期の集石遺構3基が確認された。その後旧石器時代の礫群4基と配石遺構が確認された。石器集中区も2か所確認された。遺物については、縄文後期・旧石器時代の石器が多数出土した。

C区では、人為的削平が著しくはじめ調査対象地域から外していたが、B区南端に石器集中区が確認されたことから可能な場所に限り調査を行った。ほとんどの場所においてVII層より上の層は削平されていたので、削平を受けていなかった区域のみ調査を行った。その結果縄文時代後期の不正楕円形を呈する土坑が確認された。その後旧石器時代の礫群3基が確認された。なおX層以下については、遺構・遺物が確認されなかった。



第1図 グリッド配置図(S=1/1000)



第2図 春日地区遺跡第2地点周辺地形図(S=1/5000)

第2節 基本層序

春日地区遺跡第2地点の基本層序を第3図に示した。本遺跡は、元来丘陵地の緩傾斜面に立地していたが、圃場整備により削平されたため、土層堆積状況は安定していない。主な遺物・遺構包含層は第Ⅲ層（縄文時代後期）、第Ⅵa層（縄文時代早期）、第Ⅵb～Ⅸ層（後期旧石器時代）である。

また、第Ⅹ層以下の層序は、にぶい黄褐色土(Hue10YR3～4/4)、褐色土(Hue10YR4～5/6)、褐色土(Hue7.5YR5/8)、明褐色土(Hue7.5YR5～6/8)と続く。Ⅹ層より下では、遺物・遺構は確認されなかった。詳しくは後述の「第5節 自然科学分析の結果(テフラ)」に記している。

第3図 基本土層柱状図

	I	第Ⅰ層 黒褐色土(Hue2.5Y3/2) 粗砂。ガラス成分をわずかに含む。
縄文後・ 晩期遺物 包含層	II	第Ⅱ層 黒褐色土(Hue10YR3/1) 粗砂。固くしまっている。ガラス成分を含む。
	III	第Ⅲ層 黒色土(Hue2.5Y2/1) 粗砂。ガラス成分をわずかに含む。固くしまっており、わずかに粘性をもつ。
	IV	第Ⅳ層 明黄褐色土(Hue2.5YR6/6) アカホヤ火山灰二次堆積。風成による斑文が見られる。火山豆石等ははっきり堆積していない。
	V	第Ⅴ層 暗褐色土(Hue7.5Y3/3) 粗砂。固くしまっている。
縄文早期 遺物包含 層	VI-a	第Ⅵ-a層 灰黄色土(Hue10YR4/2) 固くしまっている。0.5mm以下の白色軽石粒を含む。
	VI-b	第Ⅵ-b層 灰黄褐色土(Hue10YR5/2) 固くしまっている。小林軽石ブロック、黒色ブロックを少量含む。Ⅶ層より濃い色の褐色層である。
	VII-a	第Ⅶ-a層 暗褐色土(Hue10YR4/3) 固くしまっている。小林軽石ブロック、黒色ブロックを多く含む。
後期旧石 器第Ⅱ遺 物包含層	VII-b	第Ⅶ-b層 灰黄褐色土(Hue10YR4/2) 固くしまっている。小林軽石ブロック、黒色ブロックを少量含む。
	VII	第Ⅶ層 黒褐色土(Hue10YR3/2～3) 軟らかい。橙色軽石粒を含む。
後期旧石 器第Ⅰ遺 物包含層	IX	第Ⅸ層 褐色土(Hue10YR4/6) 砂質土。やや固めにしまっている。始良Tn火山灰を含み、班状組織が発達している。
	X	第Ⅹ層 黄褐色土(Hue10YR4～5/6) 砂質土。固くしまっている。始良Tn火山灰二次堆積層層。無遺物層。

第3節 A区の調査

A区は、調査対象区の北部に位置する。表土除去時に赤変した礫が数点出土した。調査区全体が南東方向に下る谷地形であり、黒色土が谷部へ流れ込んでいた。また近年の耕作により包含層はかなり削平されていた。遺物の出土状況を見ると、谷部へ流れ込んだⅡ層からⅢ層にかけて大量の土器・礫・石器が出土した。遺物は縄文時代後期から晩期にかけての浅鉢・深鉢、土器片鏟・土偶・磨製石斧・打製石斧・石錘・敲石・磨石・石皿・台石等の石器、少数の須恵器・土師器が検出された。土器片については接合関係が認められるものもあった。なお、A区のⅠ～Ⅳ層までの層序は第6図を参照されたい。

遺構については、調査区北部にピット群が36基確認された。調査区南西部に東西に延びる溝状遺構3基、縄文時代早期の集石遺構が1基確認された。

出土物については、そのほとんどが南半分から出土したが、人為的削平と谷部への流れ込みにより正確な出土位置を示していない。そこで遺物については一括して取り扱う。

(1) 遺 構

・溝状遺構 (第4・5図)

1号溝状遺構 (SE1)

A区DWグリッド南部付近で検出された。調査区は狭小である。また削平を受けているため検出範囲が制限され、長さは不明であるが、幅約120cmで西から東へ延びる。A区東側を南北に水道管が延びており、それ以東も著しく削平されているためその後の進行方向については不明である。断面形はU字状を呈し、検出面から深さ約30cmである。遺物は埋土から近世磁器1点・磨石・敲石・磨製石斧・打製石斧・石錘が検出された。

2号溝状遺構 (SE2)

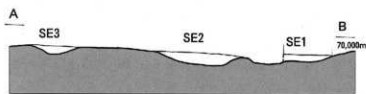
A区DWからEWグリッドにまたがる位置で検出された。SE1・SE3を切る形で検出された。遺構が調査対象区外にかかり全容は確認できなかったが、幅約120～200cmで北西から南東に延び、その後南に延びる。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さ約20～30cmである。遺物では埋土から磨石・敲石・打製石斧・石錘が検出された。

3号溝状遺構 (SE3)

A区EWグリッド北部に位置する。遺構が調査対象区外にかかり全容は確認できなかったが、幅約100～120cmで北東から南西に延びる。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さ約30cmである。遺物は埋土から磨石、敲石の破片が出土した。

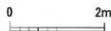
・ピット群 (第4図)

総数36のピット群が確認された。ピットの埋土は暗褐色土である。固くはないがしまりがある。表土除去後、Ⅵa層精査時に検出された。規則性がなく掘立柱建物跡等を確認できるものはなかった。遺物は土器片が数点出土した。出土した土器片は無文土器である。土器の特徴から遺構の時期に結びつくものは出土しなかった。



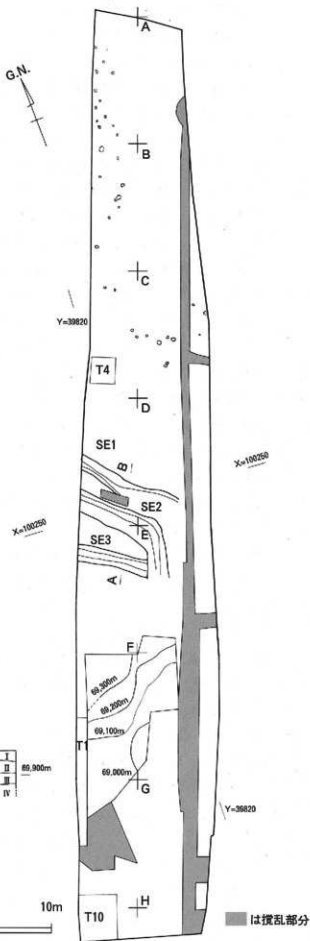
埋土 黒褐色土(Hue10YR3/2)

第5図 SE1・SE2・SE3(S=1/80)



I層 黒褐色土(Hve2.5YR3/2)
 II層 黒褐色土(Hve10YR3/1) 縄文後時代後晚期文化層
 III層 黒色土(Hve10YR 2/1) 縄文時代後晚期文化層
 IV層 明黄褐色土(Hve2.5YR6/6) アカホヤ火山灰層
 ■は攪乱部分

第6図 トレンチ1西壁土層断面図(S=1/80)



第4図 A区時期不明遺構分布図(S=1/300)

(2) 遺物

土器

縄文時代後期・晩期に位置づけられる浅鉢・深鉢等の土器が出土した。本書に掲載した遺物は、ほとんどが破片であるため器形については不明確である。ここでは、文様による分類の基準と根拠を示し、若干の説明を加える。なお、本書に掲載した資料についての詳細は観察表を参照されたい。

I類 (第7図1~9)は、口縁部に横走沈線を施す。1~3は細線羽状文を付加している。口縁部が頸部から屈折して立ち上がる。

II類 (第7図10~21)は、口縁部に凹線を施している。器形の研磨は1~9と比べ丁寧である。10は穿孔らしいものが見られる。

III類 (第7図22・8図23~27)は、口縁部に3~6本の沈線を施している。26は口縁部に3本の沈線を施す深鉢である。頸上部で弓状の湾曲が強調されている。

IV類 (第8図28・29)は、口縁部に凹線を施す浅鉢である。

V類 (第8図30~32)は、口縁部に2本の沈線を施す。

VI類 (第8図33~39)は、口縁部に1本の沈線を施す。口縁部は狭小となる。35・36は小隆起の波状口縁となる。頸部の内湾は長頸化したもの短頸化したものそれぞれである。

VII類 (第9図40~53)は、口縁部に内面沈線を施す。40・41・45は波状口縁となる。1~9のように口縁部が頸部から屈折して立ち上がるものではなく、42のように胴部が丸く膨らむ傾向が見られる。50~53は内面の横線が凹線であり、その他は内面の横線が沈線である。

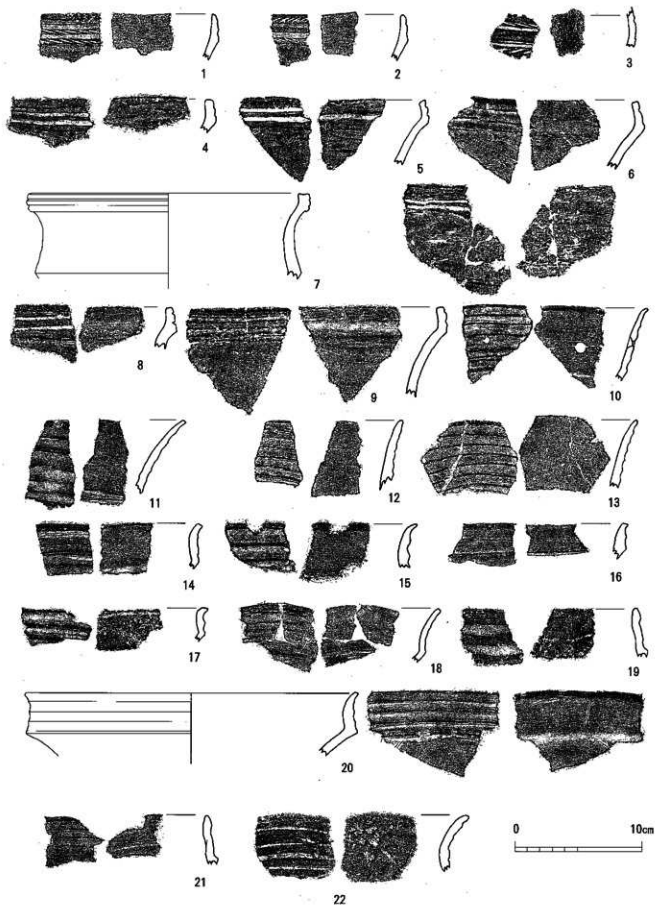
VIII類 (第10図54~59)は、無文土器の口縁部である。型式不明である。56・59は、42のように胴部が丸く膨らむ傾向が見られる。

底部(第10図60~62)は、型式不明である。60は径7.45cmでナデを施す平底である。61は径8cmでナデを施す平底である。62は径6.4cmでナデを施す上げ底ある。いずれも無文である。

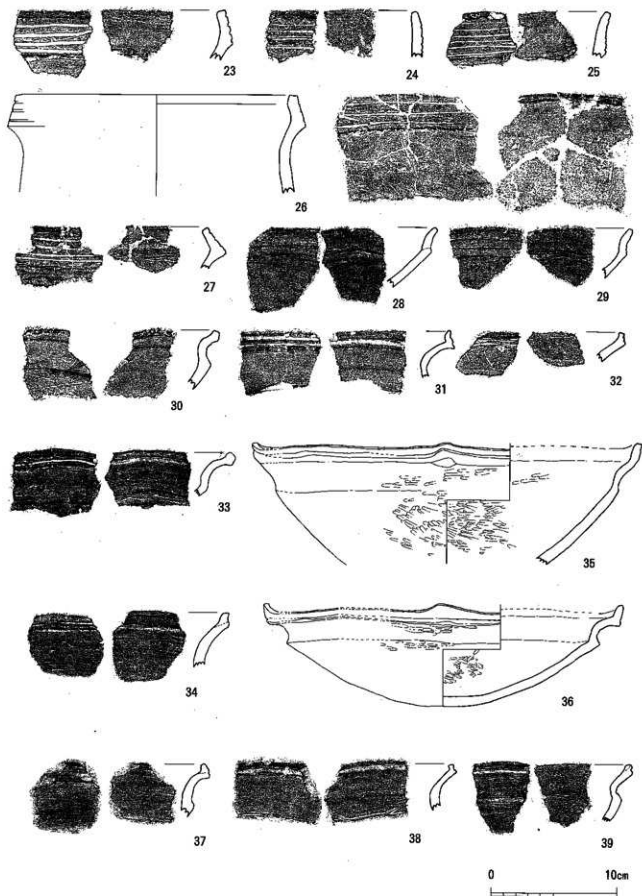
土器片錘(第10図63~65)は、本遺跡では39点出土した。これらは、長軸の両端に切り目を入れたものである。計測値は、表5「春日地区遺跡第2地点土製品計測表」を参照されたい。

土器片加工円盤(第10図66~67)は主に土器の胴部を加工している物が多く出土し、楕円形や円形に整形している。文様のあるものは出土しなかった。計測値は、表5「春日地区遺跡第2地点土製品計測表」を参照されたい。

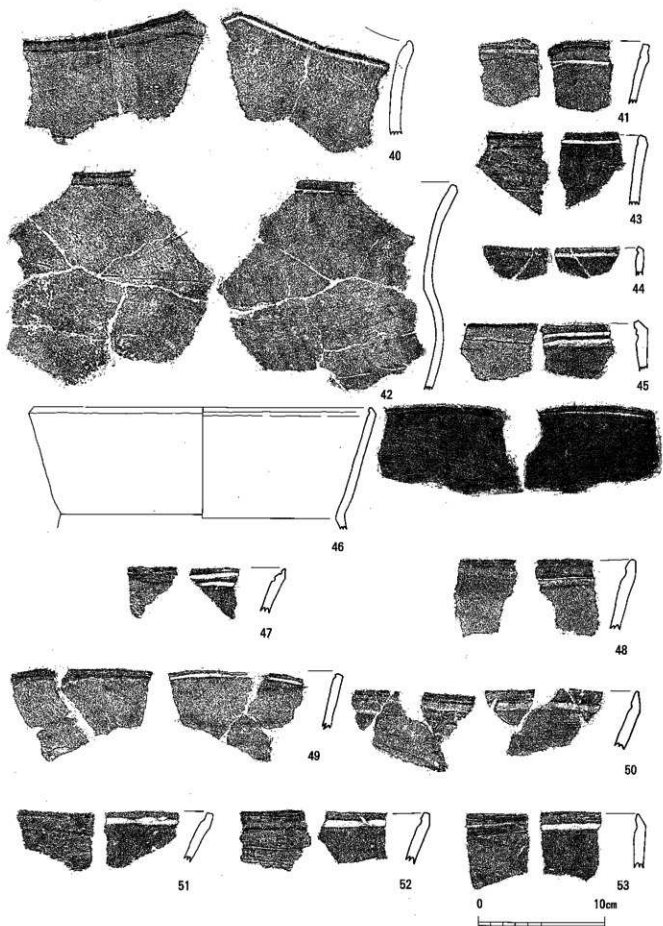
土偶(第8図68)の右胴部片である。現存長7.5cm、現存幅2.9cm、厚さ3.2cm、重さ7.9gである。胎土は、黒褐色であるが、破損した部分は、にぶい橙色である。正面に左側の乳房と思われる突起が貼付され、丁寧なミガキを施している。右側面はナデを施しており、首をつけるための支柱があったと思われる溝がある。他の装飾はない。



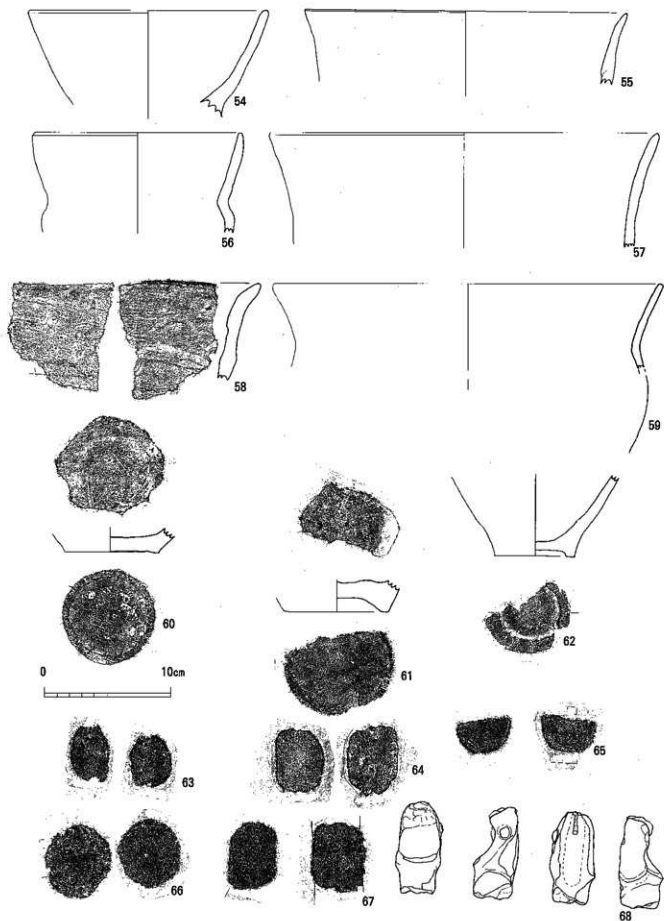
第7图 A区出土土器实测图(1)(S=1/3)



第8图 A区出土土器实测图(2)(S=1/3)



第9图 A区出土土器实测图(3)(S=1/3)



第10图 A区出土土器・土製品実測图(4)(S=1/3)

石 器

ここではA区アカホヤ火山灰層上で出土した磨石・敲石・棒状敲石・打製石斧・磨製石斧・石錘・台石・砥石を取り扱う。なかでも磨石・敲石、打製石斧、石錘は数多く出土した。石材としては主に尾鈴山系酸性岩・砂岩が使用されている。

・敲石 磨石 (第11図69～72)

磨石・敲石は使用目的により4つに分類した。石材は、砂岩、尾鈴山系酸性岩を使用している。碎片や破損したものもある。

I類 (第11図69) 側縁部にあばた状の敲打面を残し、多面体を呈する。(算盤玉状)

II類 (第11図70) 円形の扁平礫を用い、表裏面に平坦面を残す。

III類 (第11図71) 礫の一端もしくは両端に剝離面もしくは敲打痕を部分的に残す。

IV類 (第11図72) 平坦面はなく自然礫の可能性がある。

・棒状磨・敲石 (第12図73・74)

73は上下面に敲打痕を残し、74は下面に研磨痕が残る。石材は、砂岩を使用している。

・石錘 (第12図75・76)

石錘のうち、ほとんどは円形もしくは楕円形のもを打ち欠いたものであるが、数点円石の両端に長軸方向に網掛け用の切り込みを持っているもの(切目石錘)もある。石材は砂岩、頁岩、ホルンフェルスを使用している。

・打製石斧 (第12図77・78 第13図80) は形態により3つに分類した。

I類 撥形。現在の平鍬。

II類 長方形をした短冊型。

III類 上下両端が張り出し中央部がくびれた分銅型。

・磨製石斧 (第13図81)

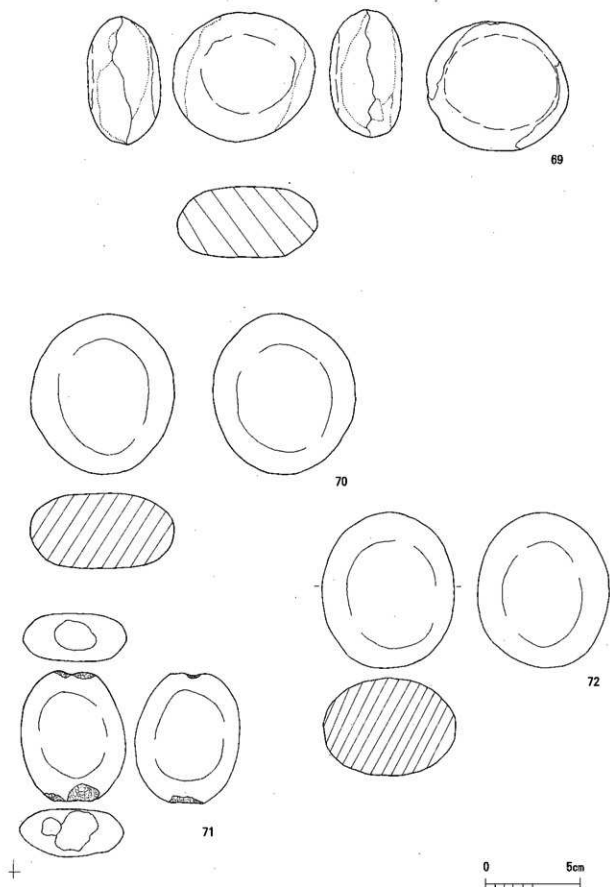
打製石斧に比べて厚みがあり、縦長剥片を素材とし、丁寧な加工が施してあり刃部をつくり出している。石材はホルンフェルスを使用している。三味線の撥に似た撥形のものである。

・砥石 (第13図79)

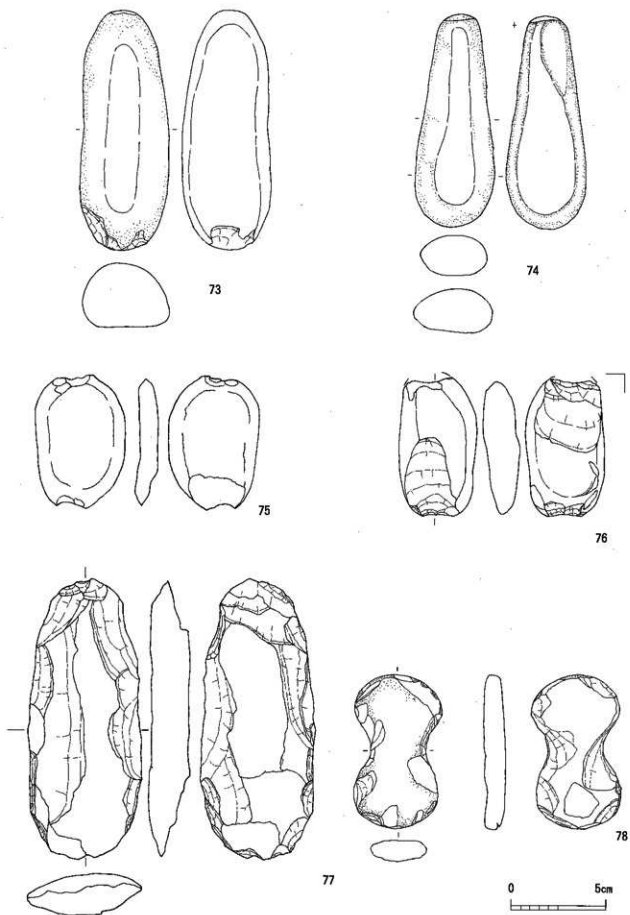
砥石は4点出土した。79は礫の中央部に砥ぎ面を持つ。有溝砥石である。石材に砂岩が使用されているため荒砥ぎ用の可能性が高い。どの器種を砥いでいたかは、刃部の厚さと溝の深さが合致するものであるが、現在不明である。

・台石・石皿 (第13図82)

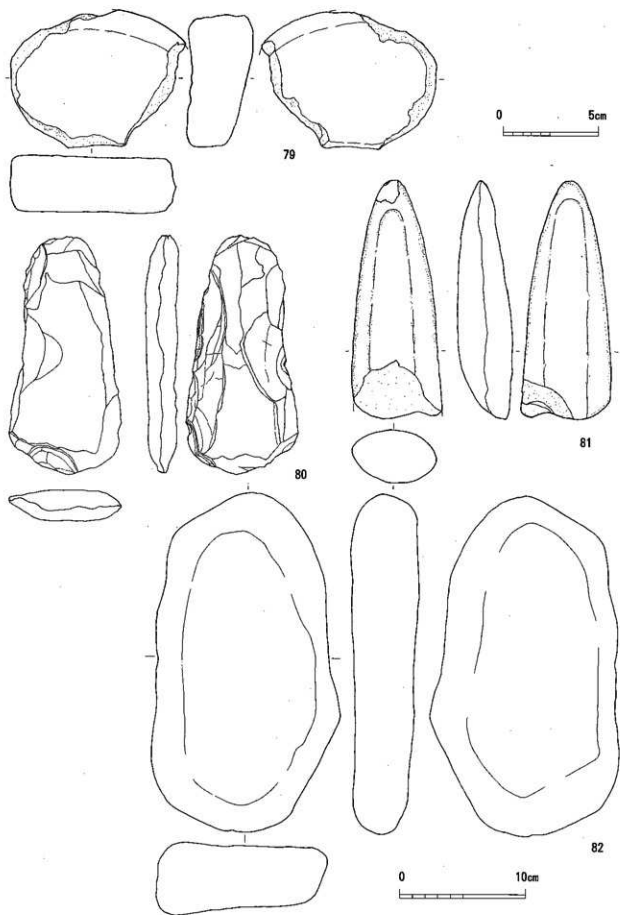
台石・石皿は10点出土した。82は台石である。楕円形の礫の表面、裏面に磨痕が残る。82の両側面にも使用痕らしい痕跡があるが、自然による研磨と判断した。石材は砂岩を使用している。



第11图 A区出土石器实测图(1)(S=1/2)



第12图 A区出土石器实测图(2)(S=1/2)



第13图 A区出土石器实测图(3) (S=1/2 79, 81) (S=1/3 80, 82)

第4節 B・C区の調査

B区は、調査対象区の南部に、C区は、その南端延長状に位置する。B・C区は北端で隆起し、南方へ緩やかに落ち込む地形である。表土除去後、V層を確認した。第IV層までが削平されていた。(第15図参照)。先ず確認トレンチで遺物が確認されたKグリッド以南の掘り下げを行った。遺構ではVIa層より土坑1基、集石遺構3基が検出された。遺物では、細石刃、台石、敲石、剥片、碎片が検出された。後期旧石器時代の文化層はVIb～IX層である(第15図)。VII層～IX層より礫群が4基、配石遺構1基が確認された。ナイフ形石器、スクレイパー、磨石、敲石そして多くの剥片・碎片がまとめて出土した。遺物集中区も2カ所確認された。その後B区Jグリッド以北とC区の掘り下げを行った。B区においては、VIa層掘り下げ時に住居跡が1軒、C区ではVII～IX層掘り下げ時に礫群が3基、配石遺構1基が確認された。遺物ではVIa～IX層にかけて細石刃、細石刃核、スクレイパー、ナイフ形石器、磨石、敲石、剥片・碎片が出土した。

1 旧石器時代の遺構と遺物

B区(Kグリッド以南)・C区において旧石器時代の遺構・遺物が確認された。本遺跡は、ナイフ形石器文化と細石器文化の2つの時期に分かれる。ここでは、細石器文化の遺構が検出されなかったため、後期旧石器第I文化層(第3図参照)の遺構のみ取り扱う。礫群7基、配石遺構2基を確認した。遺物としては、ナイフ形石器、スクレイパー、敲石、石核、剥片、碎片が出土した。本報告では、使用した目的が明確にできないため礫と礫の間の距離が短く範囲が明確なものを礫群、礫と礫の間の距離が長く範囲が散漫なものを配石遺構とする。

(1) 遺 構

7基の礫群と2基の配石遺構を検出した。遺構はNグリッド南部～Pグリッドに集中して分布する。

・礫 群(第14・17・18図参照)

礫の大半は砂岩・尾鈴山系酸性岩・流紋岩である。礫の大半は赤化し、破碎している。詳細は表1礫群・配石遺構計測表の通りである。

・配石遺構(第14・16図参照)

礫の大半は砂岩・流紋岩である。配石遺構1・2(第16図参照)とも比較的完形の礫が多く礫を移動させた形跡がない。配石遺構1は弧状に礫が連なっており、生活面の存在が推定される。

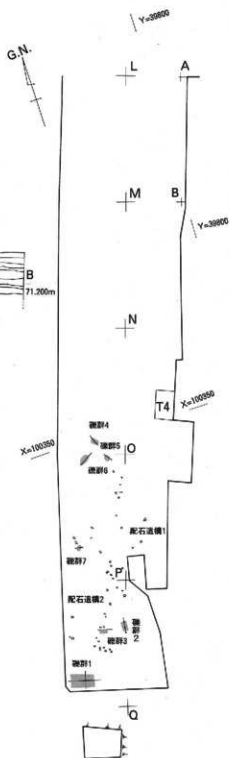
表1 礫群・配石遺構計測表

遺構番号	グリッド名	検出名	長径(cm)	短径(cm)	罹込の有無	石 材	個数(個)	円礫(%)	礫の密度	礫の赤化	炭化物	遺物混入
礫群1	PW	IX層直上	250	150	なし	砂岩	55	38.2	疎	あり	なし	あり
礫群2	PE	IX層上部	130	70	なし	砂岩	31	32.3	疎	あり	なし	なし
礫群3	PW	VII層上部	110	50	なし	砂岩	11	27	疎	なし	なし	なし
礫群4	NW	IX層上部	85	50	なし	砂岩	7	86	疎	なし	なし	なし
礫群5	OW	IX層上部	20	15	なし	砂岩	3	100	密	なし	なし	なし
礫群6	OW	VII層上部	100	60	なし	砂岩	2	33.3	疎	あり	なし	なし
礫群7	OW	VII層上部	55	40	なし	砂岩	6	100	疎	なし	なし	なし
配石1	OE	VII層上部	1040	480	なし	砂岩	30	36.7	疎	あり	なし	なし
配石2	ow-pw	VII層上部	640	320	なし	砂岩	15	60	疎	なし	なし	あり

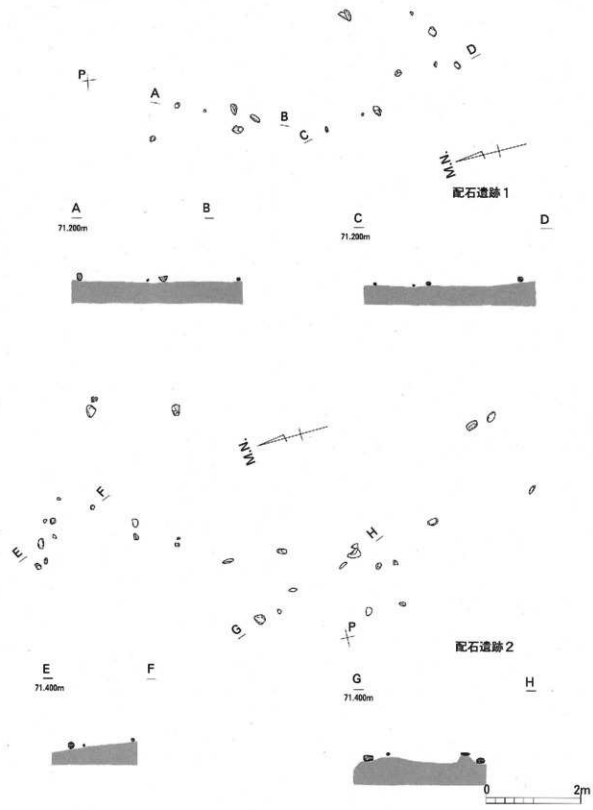


- 第I層 黒褐色土(Hve2.5Y3/2) 表土
- 第V層 黒色土(Hve10YR5/1) 耕作土
- 第Y層 暗褐色土(Hve7.5YR3/3)
- 第VIa層 灰黄色土(Hve10YR4/2)
- 第VIb層 灰黄褐色土(Hve10YR5/2) 小林塚石黒色ブロック混じり
- 第VIc層 灰褐色土(Hve10YR4/3) 小林塚石黒色ブロック混じり
- 第VId層 灰黄褐色土(Hve10YR4/2) 小林塚石黒色ブロック混じり
- 第VIe層 黒褐色土(Hve10YR3/2~3)
- 第IXa層 褐色土(Hve10YR4/6) 給食7c火跡混じり
- 第IXb層 黄褐色土(Hve10YR4~5/6) 給食7c火跡混じり

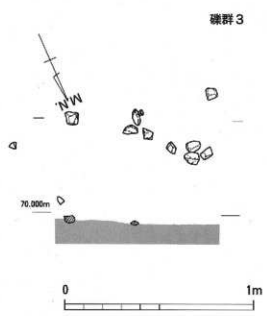
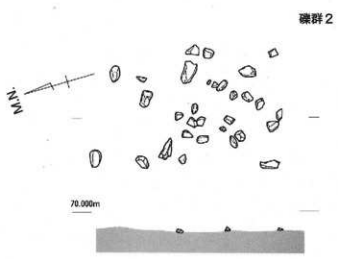
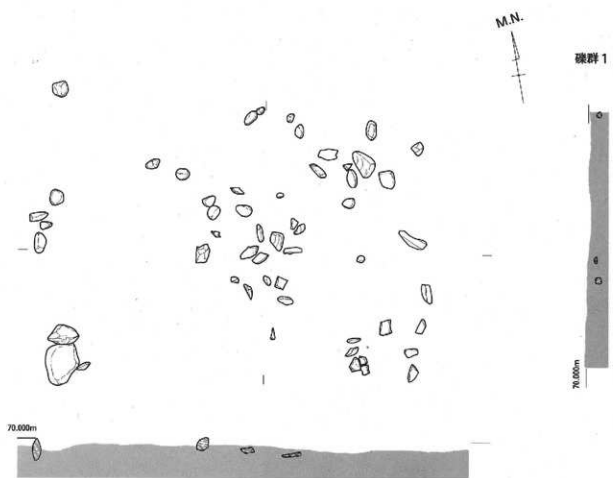
第15図 B区東壁土層断面図(S=1/80)



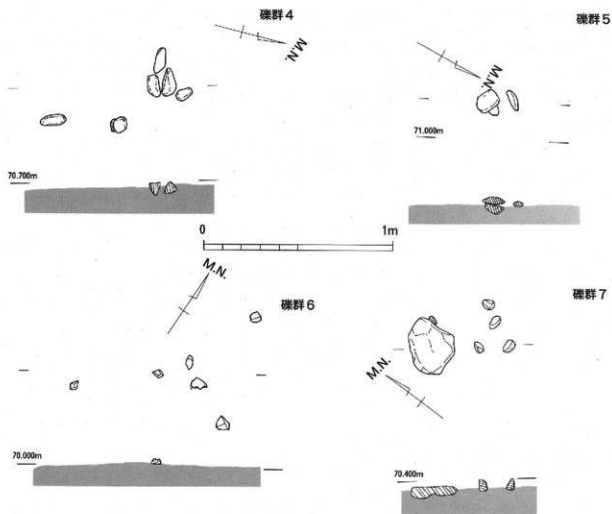
第14図 後期旧石器時代遺構分布図(S=1/300)



第16図 配石遺構実測図(S=1/80)



第17図 礫群実測図(S=1/20)



第18図 礫群実測図(S=1/20)

(2) 遺物

スクレイパー・ナイフ形石器等の第Ⅰ文化層と細石核の第Ⅱ文化層に後期旧石器時代の文化が分かれることが図19～22からも見える。なお、遺物については第Ⅰ文化層のみ図化し、第Ⅱ文化層は一部図化する。

・ナイフ形石器

ナイフ形石器は35点出土した。Ⅶ層下位からⅨ層において多く出土している。石材は頁岩が使用されている。出土したナイフ形石器は、技術形態上の特徴から大きく3つに分類可能である。

Ⅰ類 二側縁加工のナイフ形石器。平面形態や素材の使い方により細分は可能である。

Ⅱ類 一側縁加工のナイフ形石器。形態的には多様性に富み、いわゆる先断形等を包摂するカテゴリーである。

Ⅲ類 Ⅰ・Ⅱ類以外のものや破損資料が故に類型の判別が困難なものを一括する。

・スクレイパー

スクレイパーは7点出土した。サイドスクレイパーが1点、エンドスクレイパーが6点である。

剥片を素材としている。剥片の下面又は両側面に刃部をつくりだしている。素材として幅広または縦長のものを使用している。下部から側面にかけて刃部が広がっているものもある。幅広のスクレイパーと縦長のスクレイパーは、使い分けをしていたのか、縦長のスクレイパーを使い込んで幅広のスクレイパーになったのかは不明である。石材は砂岩、珪質岩、ホルンフェルス頁岩を使用している。

・細石刃核

細石刃核は20点出土した。他に細石刃核の可能性のある資料1点、ブランク1点、細石刃5点が出土している。Ⅶa～b層で多く出土している。石材では細流砂岩のもの1点を除き、黒曜石を使用している。桑ノ木津留、小国、日東産の黒曜石に類似したものが出土している。ブランクも同様である。作業面の設定部位や打面転移の有無等からも6つに分類可能である。()は出土した個数を示す。

I類 細粒砂岩製。非打面調整を施し、背縁調整あり。細粒砂岩製(1)

II類 打面調整を施し、背面に自然面が残る。黒曜石製。(7)

III類 打面調整を施し、小口に作業面が見られる。黒曜石製。(7)

IV類 打面調整を施し、背縁両端に小口な作業面が見られる。(1)

V類 打面調整を施し、作業面が全体に見られる。黒曜石製。

VI類 複数作業面を有する。黒曜石製。

・細石刃

細石刃が5点出土した。石材は全部黒曜石である。肉眼では桑ノ木津留産の黒曜石と思われる。細石刃核同様Ⅶa～Ⅶb層で多く出土している。

・二次加工剥片

二次加工剥片は6点出土した。Ⅷ層下部、Ⅸ層からの出土数が多い。素材としてホルンフェルス、頁岩の縦長剥片を使用している。Ⅷ層下部、Ⅸ層からの出土数が多い。製作技法としては剥片の一侧縁あるいは両側縁を加工し、刃部をつくりだしている。

・磨石・敲石

Ⅶa～Ⅶ層にかけて12点磨石・敲石が出土した。石材は砂岩、尾鈴山系酸性岩を使用している。分類についてはA区出土の遺物で言及した。

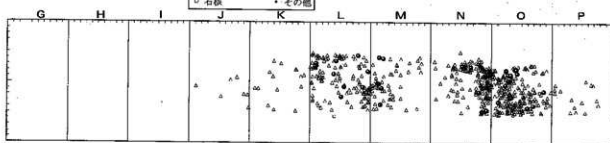
・剥片・碎片

表2及び第19～22図を参照されたい。

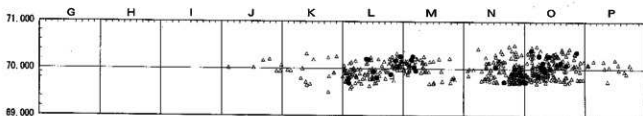
表2 春日地区遺跡第2地点層別 剥片・碎片出土数統計表

層位	チャート	黒曜石	頁岩	砂岩	ホルンフェルス	その他	合計
Ⅶa層	0	3	6	0	7	0	16
Ⅶb層	2	11	35	1	42	1	92
Ⅷa層	1	9	17	10	13	1	51
Ⅶb層	2	7	30	8	23	0	70
Ⅷ層	2	12	72	9	82	9	186
Ⅸ層	4	2	69	8	40	1	124
一括	37	78	80	4	23	1	223
計	48	122	309	40	230	13	762

平面分布図

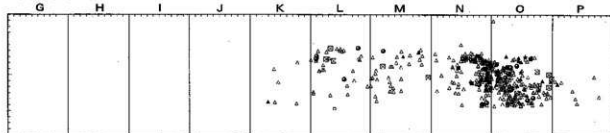


垂直分布図

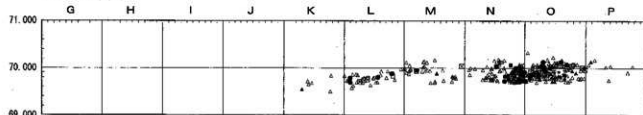


第19図 VI～VII層遺物 水平・垂直分布図

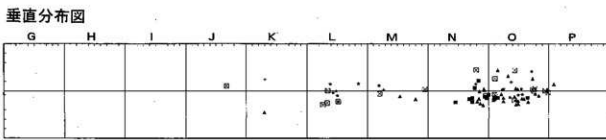
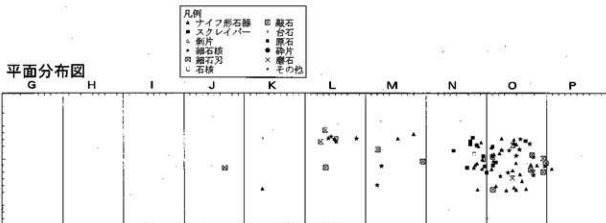
平面分布図



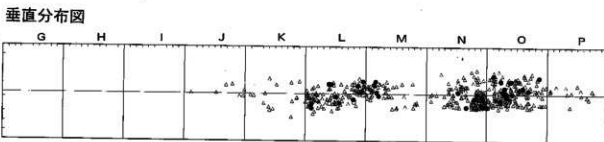
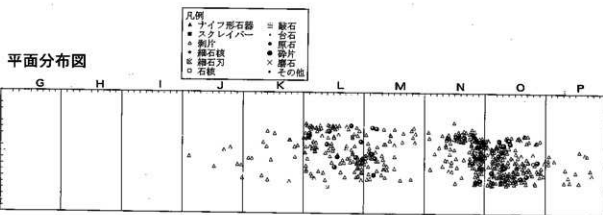
垂直分布図



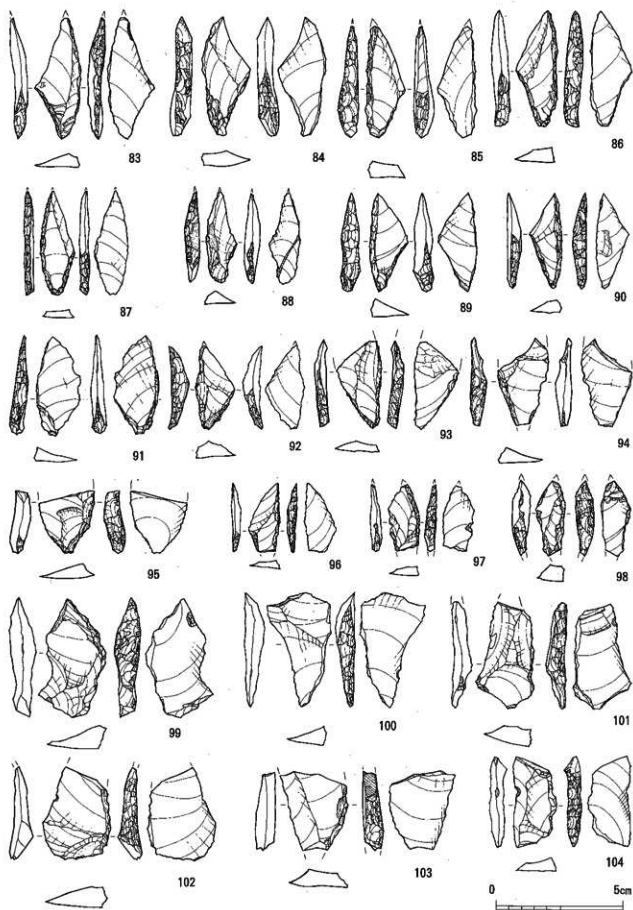
第20図 VIII～IX層遺物 水平・垂直分布図



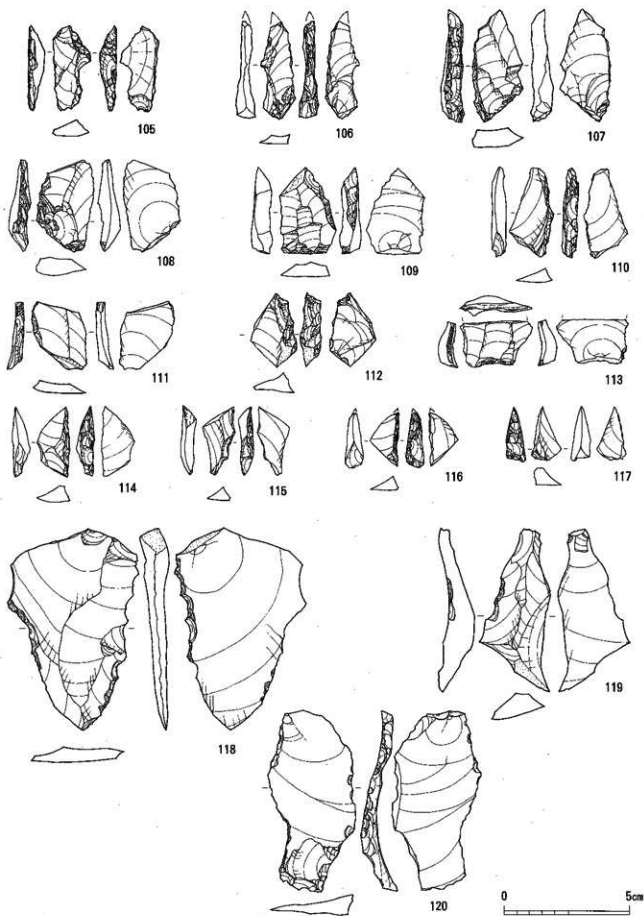
第21図 製品 水平・垂直分布図



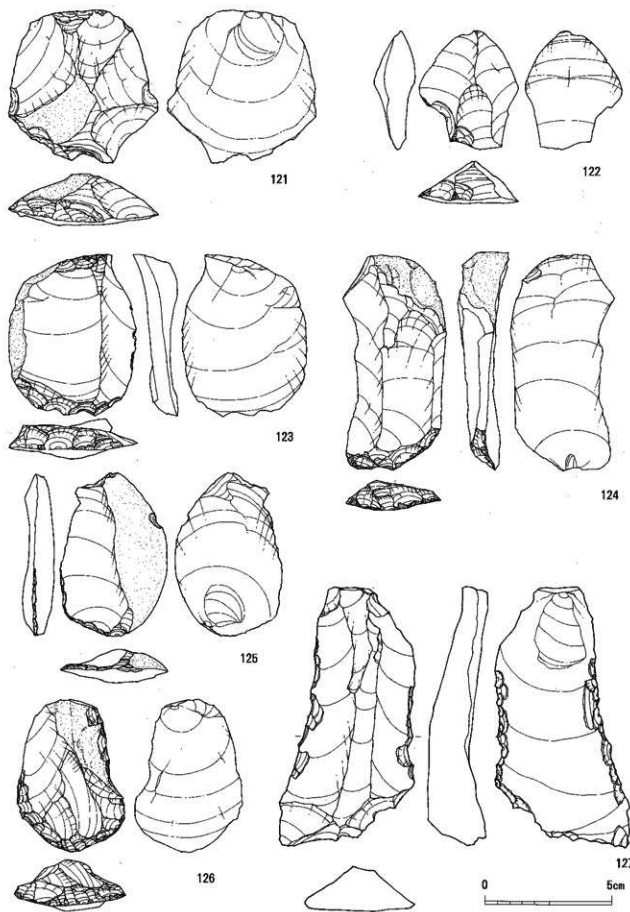
第22図 剥片、砕片、石核 水平・垂直分布図



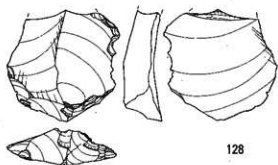
第23图 B区出土遗物实测图(1)(S=2/3)



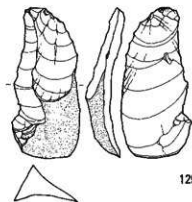
第24图 B区出土遗物实测图(2)(S=2/3)



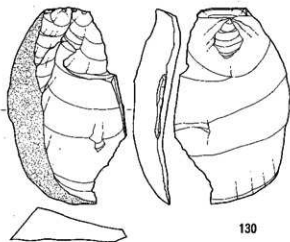
第25图 B区出土遗物实测图(3)(S=2/3)



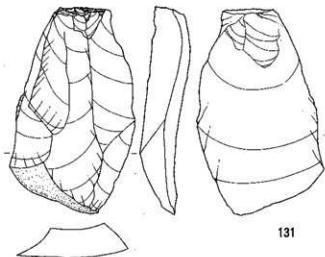
128



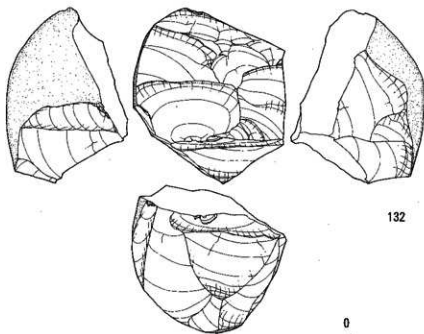
129



130



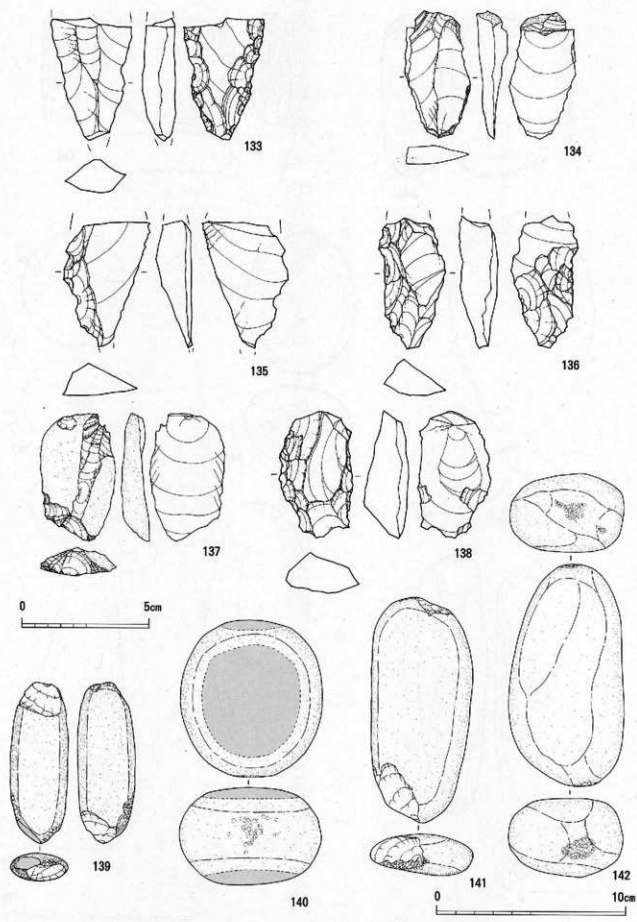
131



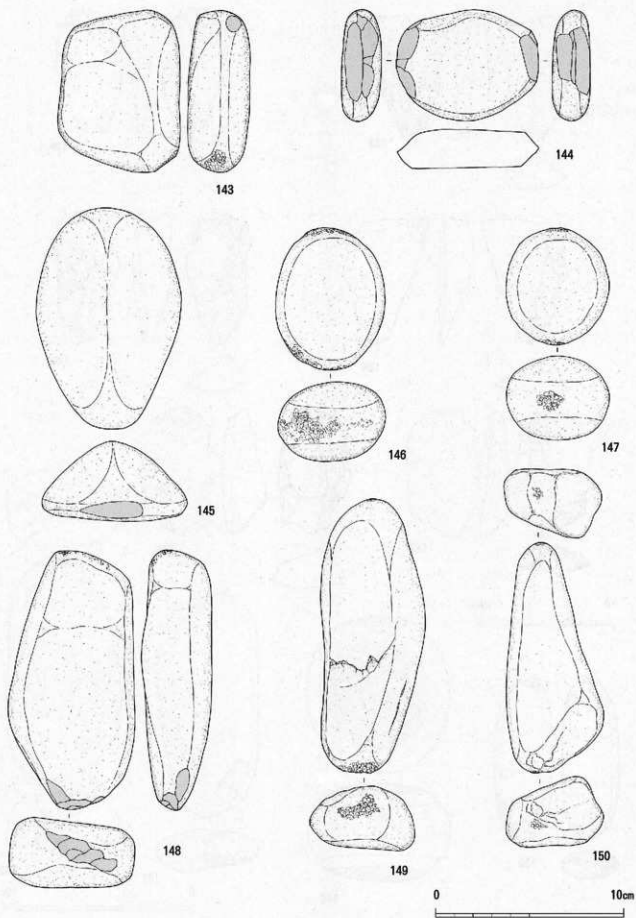
132



第26图 B区出土遗物实测图(4)(S=2/3)



第27图 B区出土物实测图(5)(133~138 S=2/3)(139~142 S=1/2)



第28图 B区出土遗物实测图(6)(S=1/2)

2 縄文時代早期の遺構

A区では、縄文時代早期の遺構として集石遺構が1基検出された。B・C区では集石遺構が3基検出された。ここでは本来B・C区の縄文時代早期の遺構を掲載するところであるが、A・B・C区の縄文時代早期の遺構をまとめて掲載した。

・集石遺構

縄文時代の集石遺構は、本報告書で長軸、短軸それぞれ1~1.5mの範囲に密に礫が集まっている遺構と定義づける。集石遺構は、4基検出した。A区に1基、B区に3基と南側に集中している(第29図参照)。VIa層掘り下げ中に検出された。構成礫は、ホルンフェルス、尾鈴山系酸性凝灰岩、砂岩を主体としており、円礫、角礫、破砕礫が利用されている。土坑(掘り込み)の有無、礫の被熱度合、炭化物の有無などによりいくつかの段階を想定し得る。

SI1 (第30図1)

A区Eグリッド東側で検出された。掘り込みは認められない。60個程の円礫・角礫・破砕礫が集められている状態である。礫の重なりは見られない。礫の赤変は見られたが、炭化物は見られなかった。準備礫の可能性はある。

SI2 (第30図2)

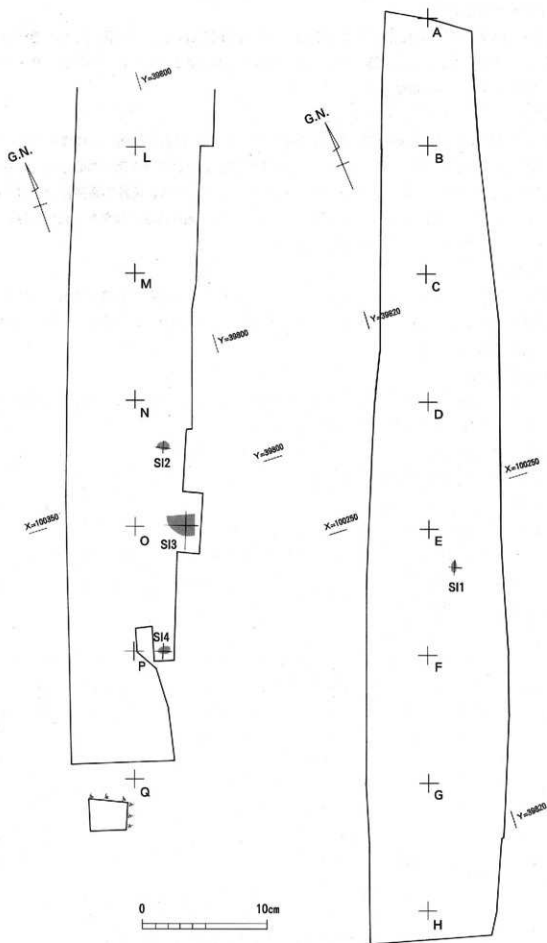
B区Nグリッド東側で検出された。0.86×0.86mの楕円形の土坑を有し、土坑の中外に礫が密集して検出された。炭化物は見られなかった。礫間より石器(頁岩剥片)が1点確認された。ここで礫のデータを述べる。礫総数は204個あり、その内訳は角礫が126個、円礫が78個である。そのうち赤変しているものが129個ある。動植物の調理場として使用されていた可能性がある。

SI3 (第31図)

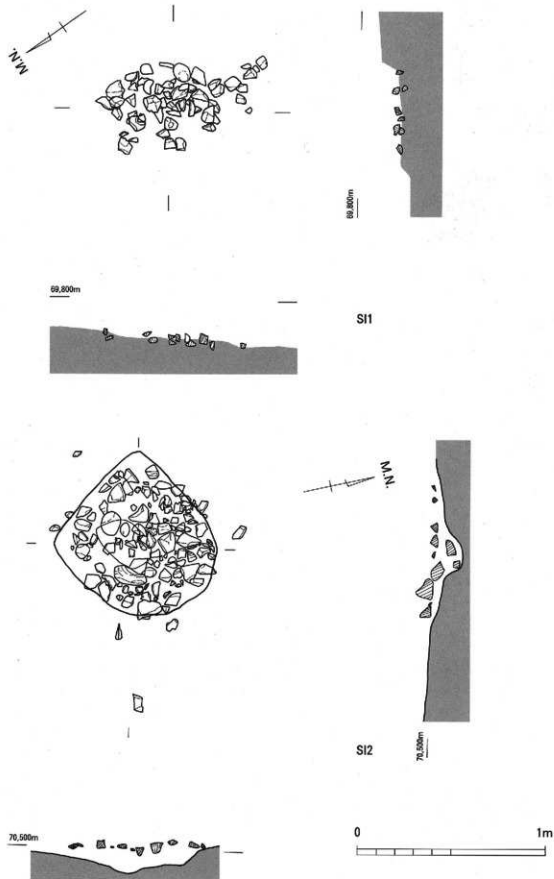
B区Oグリッド(第29図)東側で検出された。掘り込みは認められない。150個程の礫が散逸された状態で検出された。まとまりが3つあるように見受けられるが、いずれも掘り込み、炭化物は確認できなかった。多くの礫が円礫・破砕礫であり、赤変している。集石に隣接する形で磨石1点、敲石1点確認された。廃棄礫の可能性はある。

SI4 (第32図)

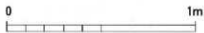
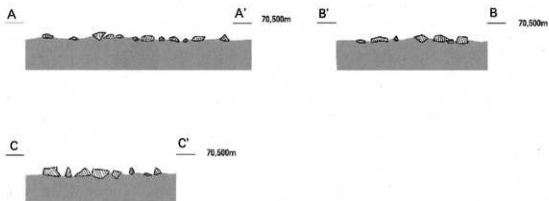
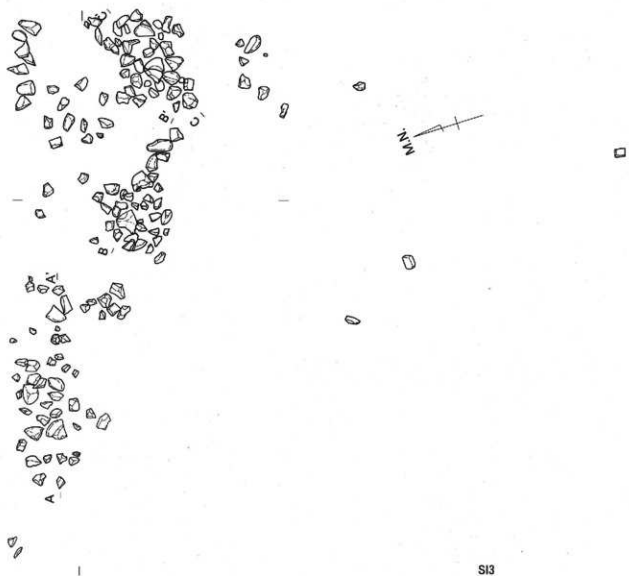
B区Oグリッド東南部で検出された。人為的削平により遺構の南側が一部消失している。掘り込みは、はっきりしない。150個程の礫が密集して検出された。ほとんどの礫は赤変している。礫の下層から直径1mm程度の炭化物が見られた。土器片が1点出土した。石皿等の再利用と思われる礫も数点見られた。動植物を調理する場所として使用されていた可能性がある。



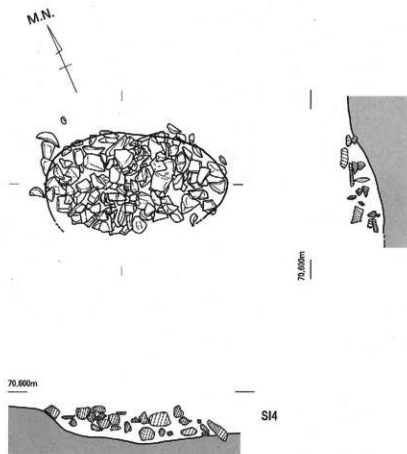
第29圖 縄文時代早期遺構分布図(S=1/300)



第30図 縄文時代早期集石遺構分布図(1)(S=1/20)



第31図 縄文時代早期集石遺構分布図(S=1/20)



第32図 縄文時代早期集石遺構分布図(3) (S=1/20)

第32図 集石遺構実測図(3) (S=1/20)

3 縄文時代後期の遺構と遺物

(1) 遺 構 (第33・34・36図)

1号竪穴住居 (SA1) (第34図)

B区Jグリッド西部(第33図参照)で検出された竪穴住居跡である。住居西側の大部分は調査区外であるため、約2分の1を検出した。一辺4.1mの隅丸方形プランで、VIa層を切り込んでいる。遺構の残存状況が悪く、検出面から床面までの深さは最深部で約15cmである。住居の埋土は、黒褐色を主体としている。SA1を南北にSE4が切っているため境界が不明である。柱穴、炉跡は確認できなかった。

1号土坑 (SC1) (第36図)

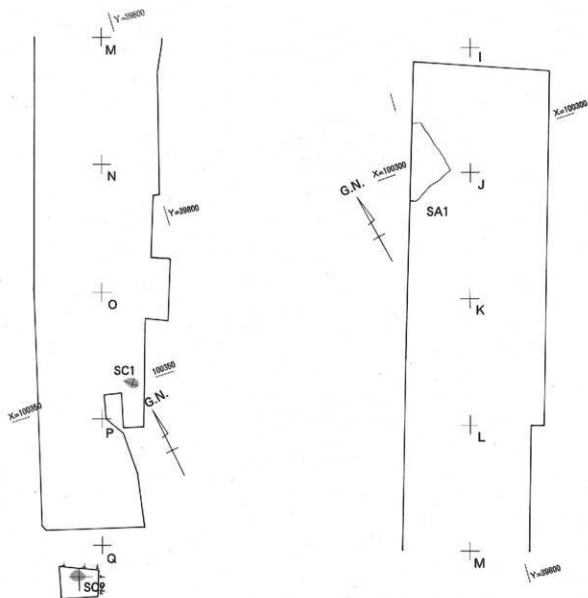
Oグリッド東南部で検出された。平面形は長径1.0m、短径0.85m、深さは最深部で約6cmの隅丸長方形をなす。土坑内に掘り込みが見られたが、性格は不明である。

2号土坑 (SC2) (第36図)

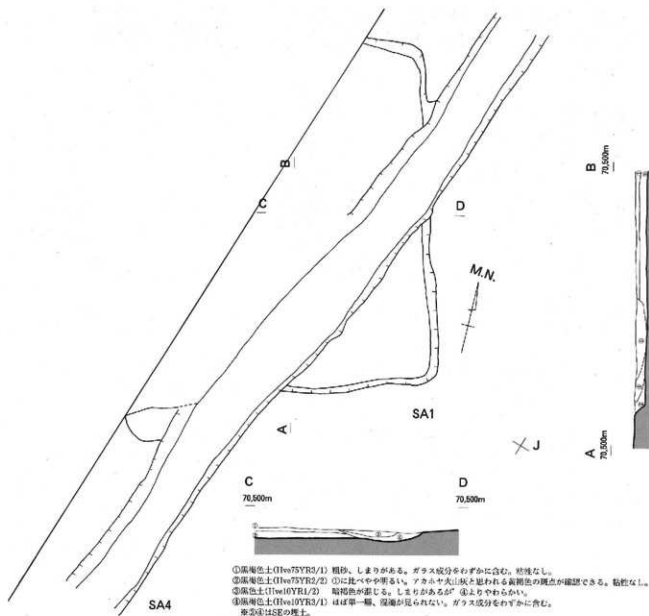
Qグリッド西部で検出された。平面形は長径1.5m、短径1.1m、深さは最深部で約20cmの不整形プランをなす。隣接してピットが1基検出されたが、関連のあるものかは不明である。

(2) 遺 物 (第35図)

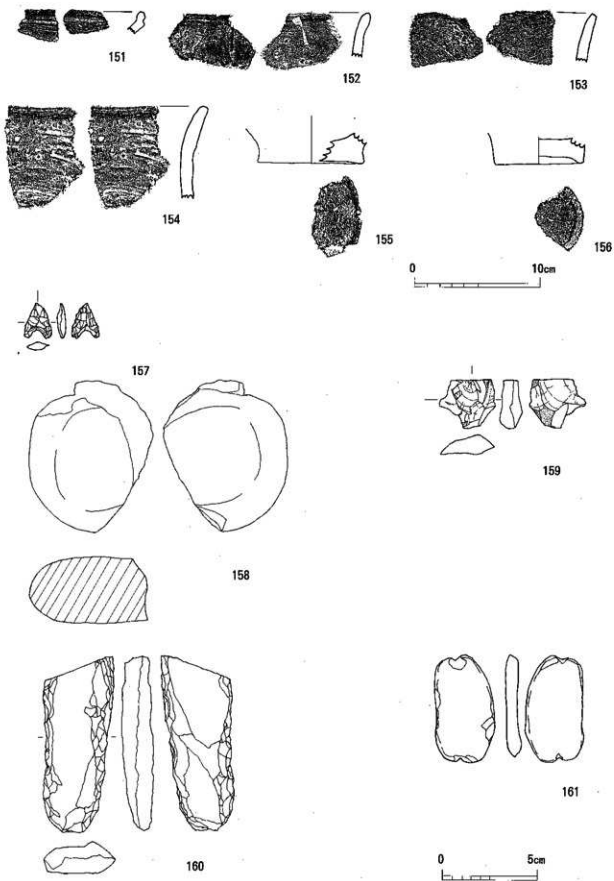
遺物は250点出土した。151は、ミガキ調整を施している有文土器で、口縁部に横走沈線文を施している。152~154は、無文土器である。155~156は円筒形土器の底部であり、底面にナデを施す。157は石鏃、160は打製石斧、159は石核、158は磨石兼敲石、161は石錘である。



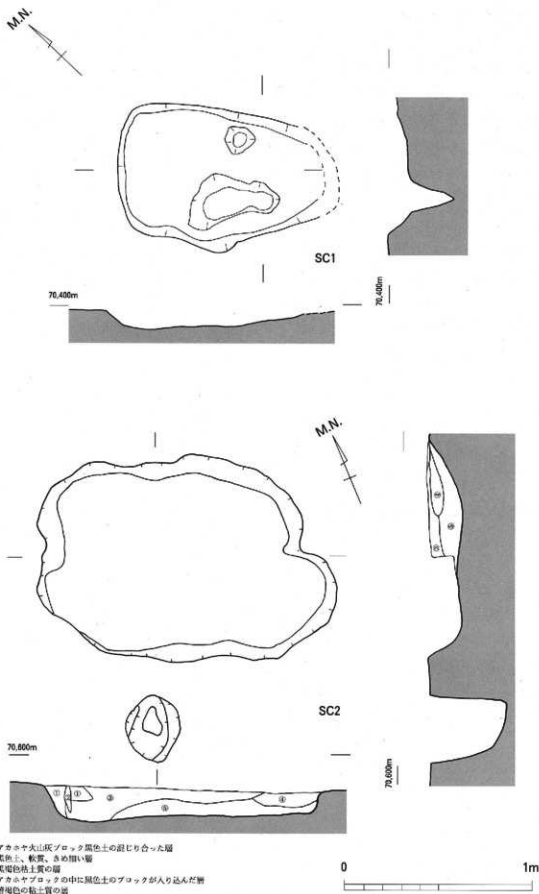
第33圖 縄文時代後期遺構分布図(S=1/300)



第34図 SA1・SA4実測図(S=1/50)



第35図 SA1出土遺物実測図(S=1/3 177~182 S=1/2 183~187)



第36図 縄文時代後期末測図(S=1/20)

4 時期不明の遺構と遺物

(1) 遺 構

4号溝状遺構 (SE4) (第34図)

調査区南側のIWからJWグリッド付近(第37図)に位置し、SA1を切る形で検出された。遺構が調査対象区外にかかり全容は確認できなかったが、幅約60～100cmで北東から南西に延びる。断面形は浅いU字状を呈し、検出面からの深さ約30～50cmである。SE1と同様に流路的な機能が推測される。遺物は、埋土中より磨石、敲石、磨製石斧が出土している。A区で検出されたSE1、2、3に向かって北東に延びるが関連は不明である。

ピット群

総数296のピット群が確認された(第37図)。ピットの埋土は2種類ある。1つは暗褐色土である。固くはないがしまりがある。もう1つは黒褐色で、きめ細かく柔らかい。そのほとんどが、VIa層からVIIb層の掘り下げ時に検出された。遺物は主にJグリッドからOグリッドで検出されている。立ち上がりは削平されており、確認することができない。規則性のあるものはないが、埋土の色が1つでないことから複数の時期のピットが重なり合っていると思われる。

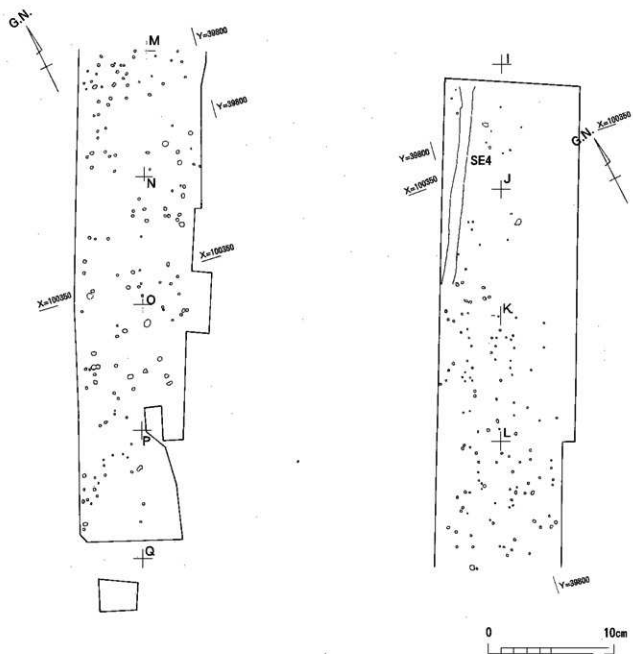
(2) 遺 物

・ピット出土の遺物

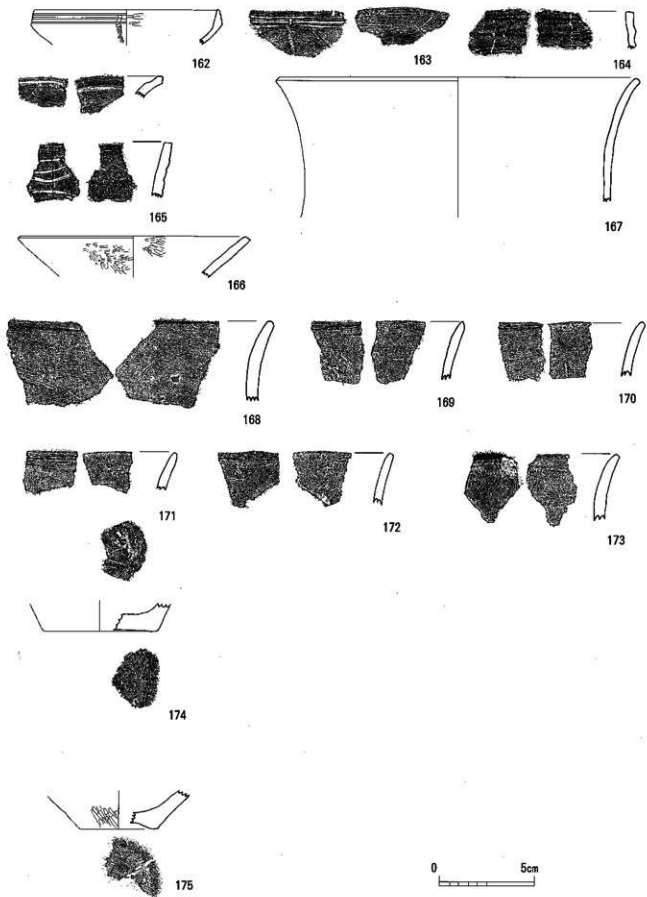
ピット群からは口縁部に横走沈線を施す浅鉢(第38図162)、凹線を施す(第38図163)・1～4本の沈線の走る(第38図164・165)土器の口縁部が出土した。無文土器(第38図166～173)も出土している。遺物は主にJ～Oグリッドで検出されている。底部(第38図174・175)は、型式不明である。いずれも平底で無文である。遺物からは縄文時代後・晩期のものと思われる遺物が出土している。

・その他時期不明の遺物

須恵器、土師器の小片、石包丁が1点出土している。いずれも攪乱部もしくは調査区一括で取り上げている。また弥生時代以降の遺構は確認できていない。



第37圖 B・C時期不明遺構分布圖(S=1/300)



第38图 BC区时期不明遺構出土遺物実測図

表4 春日地区遺跡第2地点 土器観察表(2)

遺跡番号	種別	遺構・中心	出土層	位置 (m)			手法・器種・文様ほか		色		胎土の特徴	備考
				口径	高さ	器高	外面	内面	外面	内面		
51	縄文土器	海跡口輪部	A区	-	-	-	ナデ表面ナズリ	ナデ	沈降	褐色	褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。
52	縄文土器	海跡口輪部	A区	-	-	-	ナデ表面ナズリ	ナデ	沈降	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。
53	縄文土器	海跡口輪部	A区	-	-	-	ナデ表面ナズリ	ナデ	沈降	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。
54	縄文土器	L1層-1部	A区	-	-	-	ナデ表面ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。
55	縄文土器	口輪部	A区	-	-	-	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。	
56	縄文土器	口輪部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・明布・灰白色を含む。
57	縄文土器	口輪部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤色・灰白色を含む。
58	縄文土器	口輪部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・透明或黄褐色を含む。
59	縄文土器	口輪部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・透明・黄褐色を含む。
60	縄文土器	底部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・灰黄色・黄褐色を含む。
61	上面片	口輪部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。
62	縄文土器	底部	A区	-	-	-	ナズリ	ナデ	明布	赤褐色	赤褐色	1m以下の灰白・赤褐色 断面透明光沢を含む。
151	縄文土器	L1層	B区 SA1	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	褐色	褐色	1m以下の灰白・灰白色 1m以下の透明光沢を含む。	
152	縄文土器	口輪部	B区 SA1	-	-	-	縦方向のナズリ	縦方向のナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
153	縄文土器	口輪部	B区 SA1	-	-	-	縦方向のナズリ	縦方向のナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
154	縄文土器	口輪部	B区 SA1	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
155	縄文土器	底部	B区 SA1	-	-	-	ナズリ	ナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
156	縄文土器	底部	B区 SA1	-	-	-	ナズリ	ナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
163	縄文土器	口輪部	B区 SR36	-	-	-	ナズリ	ナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の赤黄・灰白色 断面透明光沢を含む。	
164	縄文土器	口輪部	B区 SR37	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
165	縄文土器	口輪部	B区 SR38	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
166	縄文土器	口輪部	B区 SR39	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
167	縄文土器	口輪-胴上部	B区 SR35	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
168	縄文土器	口輪部	B区 SR34	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
169	縄文土器	口輪部	B区 SR37	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
170	縄文土器	口輪部	B区 SR38	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
171	縄文土器	口輪部	B区 SR39	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
172	縄文土器	口輪部	B区 SR36	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
173	縄文土器	口輪部	B区 SR37	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
174	縄文土器	口輪部	B区 SR38	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	
175	縄文土器	口輪部	B区 SR39	-	-	-	丁寧なナズリ	丁寧なナズリ	赤褐色	赤褐色	1m以下の透明・赤褐色を含む。	

表5 土製品計測表

遺物番号	器種	器位	出土位置	最大径 (cm)	最大高 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
83	土器片断	瓦片	A区	4.75	3.6	1	18	
84	土器片断	瓦片	—	5.7	4.25	0.9	31	
85	土器片断	瓦片	—	3.15	4.45	0.7	10	
86	土器片断(内装)	瓦片	A区	6.9	5.25	0.9	31	
87	土器片断(内装)	瓦片	A区	5.3	3.5	0.7	10	

表6 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(1)

遺物番号	器種	器位	出土位置	最大径 (cm)	最大高 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
88	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.8	1.9	0.7	4.1	
89	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.7	1.9	0.8	5.5	
89	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.4	1.55	0.8	5	
86	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.55	1.65	0.75	4.2	
87	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.1	1.35	0.4	2	
88	ナイフ型石器	瓦片	B区	5.6	1.2	0.6	1.9	
89	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.9	1.45	0.8	3.2	
90	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.75	1.3	0.65	3.1	
91	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.9	1.75	0.7	3.2	
92	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.2	1.6	0.8	2.6	
93	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.5	1.75	0.6	2.9	
94	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.6	2	0.7	3	
95	ナイフ型石器	瓦片	B区	2.5	2.2	0.95	3.1	
96	ナイフ型石器	瓦片	B区	2.7	1.25	0.55	1.1	
97	ナイフ型石器	瓦片	C区	2.6	1.3	0.45	1.5	
98	ナイフ型石器	瓦片	B区	3	1.2	0.75	2.4	
99	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.7	2.65	1	9.1	
100	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.5	2.55	0.85	9.4	
101	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.2	2.3	0.8	6.1	
102	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.7	2.7	0.9	7.4	
103	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.1	2.65	0.8	6.6	
104	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.6	1.7	0.7	4	
105	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.4	1.5	0.65	5	
106	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.85	1.4	0.8	3	
107	ナイフ型石器	瓦片	B区	4.45	2	0.9	7.8	
108	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.8	2.35	0.75	5.8	
109	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.4	2.8	0.85	5.9	
110	ナイフ型石器	瓦片	B区	3.6	1.8	0.8	3.1	
111	ナイフ型石器	瓦片	B区	1.3	2.9	0.7	3.2	
112	ナイフ型石器	瓦片	B区	3	1.8	0.75	3.4	
113	ナイフ型石器	瓦片	B区	1.3	2.9	0.7	3.2	
114	ナイフ型石器	瓦片	B区	1.8	1.4	0.45	2.1	
115	ナイフ型石器	瓦片	B区	3	1.2	0.45	1.5	
116	ナイフ型石器	瓦片	B区	2.1	1.13	0.6	1.6	
117	ナイフ型石器	瓦片	B区	2.1	1.05	0.75	1.9	
118	二次加工片断	瓦片	B区	8.1	4.2	1.05	27	
119	二次加工片断	瓦片	B区	6.45	3	1.13	19.4	
120	二次加工片断	瓦片	B区	7.35	3.45	0.75	18.7	
121	スクレイパー	瓦片	B区	4.1	3.85	1.35	73.5	
122	スクレイパー	瓦片	B区	3.2	2.6	1.1	18.3	
123	スクレイパー	瓦片	B区	4.3	2.5	0.9	44.5	
124	スクレイパー	チャート	B区	5.7	2.6	0.8	38	
125	スクレイパー	瓦片	B区	4.35	2.8	0.9	34.1	
126	スクレイパー	チャート	B区	4	2.8	1.4	39.5	

表7 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(2)

遺物番号	器種	器位	出土位置	最大径 (cm)	最大高 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
127	スクレイパー	瓦片	B区	6.75	3.3	1.3	91.4	
128	打割石片	オホツツムス	B区	3	5.8	0.95	32.7	
129	割片	瓦片	B区	4	1.8	0.8	15.7	
130	割片	瓦片	B区	5.3	3.05	0.9	49.3	
131	割片	オホツツムス	B区	5.45	3.2	0.95	37.8	
132	石核	瓦片	C区	4.4	4	3.3	299.3	
133	二次加工片断	砂岩	B区	3.3	3.3	0.9	15.3	
134	削器	オホツツムス	C区	8.3	1.7	0.5	13.9	
135	二次加工片断	砂岩	B区	3.3	2.05	0.8	17.1	
136	削器	瓦片	C区	3.5	1.6	0.95	17.1	
137	二次加工片断	瓦片	C区	3.35	1.95	0.8	15	
138	石核	瓦片	B区	3.4	1.9	0.95	25.8	
139	磨石	砂岩	B区	8.8	3.1	1.4	57	
140	磨石	砂岩	B区	12.5	7.5	5.2	452.4	
141	磨石	砂岩	B区	8.6	6.5	2.45	242.4	
142	磨石	砂岩	B区	11.8	6.05	4.2	454.7	
143	磨石	砂岩	B区	8.6	6.5	3.4	289	
144	磨石	砂岩	B区	5.9	7.6	2	142.6	
145	磨石	砂岩	B区	11.75	7.7	3.7	361.8	
146	磨石	砂岩	B区	7.6	5.75	4.2	204.8	
147	磨石	砂岩	B区	6.2	5.5	4.4	177.7	
148	磨石	砂岩	B区	13.7	6.7	3.7	493.7	
149	磨石	砂岩	B区	14.65	8.65	3.55	349.3	
150	磨石	砂岩	B区	12.25	5.1	3.7	275.1	

表8 春日地区遺跡第2地点 石器計測表(3)

遺物番号	器種	器位	出土位置	最大径 (cm)	最大高 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考
89	磨石	砂岩	A区	6.75	7.4	3.75	284	1号
70	磨石	砂岩	A区	8.45	7.55	4	366	2号
71	磨石	砂岩	A区	6.95	5.55	2.6	353	3号
72	円磨	砂岩	A区	8.2	7	5.1	423	4号
73	棒状石片	砂岩	A区	12.65	4.75	3.4	303	
74	棒状石片	砂岩	A区	8.6	4.2	2.15	187	
75	石核	砂岩	A区	7.05	4.8	1.2	94	
76	心磨	瓦片	A区	7.4	4.15	1.95	94	
77	打割石片	瓦片	A区	14.85	6.1	2.15	347	瓦片 割片
78	打割石片	瓦片	A区	4.8	8.2	1.2	67	瓦片 割片
79	砥石	砂岩	A区	7.3	9.2	3.55	291	
80	打割石片	オホツツムス	A区	18.7	8.8	2.6	497	1号 磨石
81	磨石	オホツツムス	A区	12.6	4.85	2.8	214	
82	台石	砂岩	A区	27.5	14.9	5.85	3,005	
157	石核	オホツツムス	B区	1.9	1.4	0.5	18	
158	磨石	砂岩	B区	8	6.5	3.5	260	2号
159	石核	チャート	B区	2.58	2.95	1.05	8	
160	打割石片	オホツツムス	B区	9.2	3.8	1.85	72	3号 磨石
161	石核	砂岩	B区	5.5	4.9	1.5	59	

表9 A区出土石器統計表 (実測図掲載分を除く)

器 種	個数	総重量(g)	備 考
磨石兼敲石	52	14,683	
磨石	29	6,534	
敲石	15	2,747	
円礫(I類)	36	8,210	
円礫(II類)	2	1,928	
棒状敲石	33	19,000	
打製石斧(I・II類)	99	1,500	I類:平鎌型 II類:短冊型
打製石器(III類)	4	500	分胴型
磨製石斧	98	23,250	
裂塊石器	13	4,262	
石錘(砂岩)	76	3,110	
石錘(砂岩以外)	41	2,500	
くぼみ石	2	467	
台石 石皿	9	17,942	
研磨痕のある石器	3	198	
突形の石斧	1	2,500	
砥石	3	1,586	
石柱	1	135	
	517	111,052	

表10 B区出土石器統計表 (実測図掲載分を除く)

器 種	個数	総重量(g)	
ストーンリタッチ	5	2,200	
磨石兼敲石	5	500	
磨石	7	1,630	
敲石	37	15,305	
円礫(I類)	25	9,628	
棒状敲石	1	150	
打製石斧(I・II類)	7	975	
磨製石斧	9	2,000	
裂塊石器	4	3,497	
石錘(砂岩)	20	1,578	
台石 石皿	1	2,523	
砥石	1	757	
石匙	1	15	
石包丁	1	51	
	124	40,809	

1. はじめに

宮崎県中南部の火山灰土中には、蛤良、鬼界、簗島、桜島などのカルデラ火山や成層火山から噴出したテフラが認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている示標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡において求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。そこで、年代の不明な石器が認められた春日地区遺跡第2地点において、地質調査を行って土層の記載を行うとともに、テフラ分析を行って示標テフラの層位を求め、遺物包含層の層位や年代に関する資料を収集することになった。調査の対象となった地点は、A区T3(図4参照)、A区T10(図4参照)、B区T4(図14参照)の3地点である。

2. 土層の層序

(1) A区T3

A区T3では、下位より黄色砂層(層厚10cm以上)、水平層理が発達した黄灰色砂層(層厚69cm)、暗灰褐色土(層厚2cm)、黄灰色砂層(層厚0.8cm)、暗灰褐色土(層厚1cm)、黄色砂層(層厚1cm)、暗灰褐色土(層厚3cm)、褐色土(層厚4cm)、暗灰褐色土(層厚7cm)、褐色土(層厚4cm)、暗灰褐色土(層厚5cm)、黄色軽石層(層厚1cm、軽石の最大径2mm)、暗灰褐色土(層厚5cm)、砂混じり褐色土(層厚9cm)、暗灰色砂質土(層厚8cm)、褐色土(層厚18cm)、暗灰色砂質土(層厚31cm)、暗灰褐色土(層厚26cm)、褐色土(層厚8cm)、橙色軽石混じり暗灰褐色土(層厚5cm、軽石の最大径3mm)、灰褐色土(層厚13cm)が認められる。

(2) A区T10

A区T10では、下位より黄色砂層(層厚10cm以上)、黄色軽石混じりでかすかに成層した黄灰色砂層(層厚19cm、軽石の最大径3mm)、褐色砂質土(層厚16cm)、灰褐色土(層厚17cm)、橙色軽石混じり暗灰色土(層厚14cm、軽石の最大径5mm)、灰褐色土(層厚23cm)、暗灰褐色土(層厚7cm)、黒灰褐色土(層厚17cm)、橙色細粒軽石に富む黒灰色土(層厚2cm、軽石の最大径2mm)、橙色細粒火山灰層ブロック混じり褐色土(層厚14cm)、黒褐色土(層厚9cm)、黒色表土(層厚46cm)が認められる。

これらのうち橙色細粒軽石と橙色細粒火山灰層は、層相から約6,300年前*1に南九州地方の鬼界カルデラから噴出した鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井、1978)と考えられる。

(3) B区T4

B区T4では、下位より暗褐色土(層厚8cm)、石英が多く含まれている黒褐色土(層厚22cm)、暗褐色土(層厚6cm)、成層したテフラ層(層厚25cm)、黒灰色砂質土(層厚7cm)、黄灰色砂層(層厚10cm)、砂混じり灰褐色土(層厚13cm)、砂混じり褐色土(層厚18cm)、暗灰褐色土(層厚27cm)、橙色軽石混じり暗灰色土(層厚9cm、軽石の最大径3mm)、橙色軽石が多く含まれる黒灰色土(層厚8cm、軽石の最大径3mm)、褐色土(層厚13cm)、若下色調が暗い褐色土(層厚16cm)、暗褐色土(層厚7cm)、黒灰褐色

表土(層厚32cm)が認められる。

これらのうち、成層したテフラ層は、下部の黄色細粒火山灰層(層厚2cm)と、上部の逆級化構造が認められる黄色砂質細粒火山灰層(層厚23cm)からなる。

3. 火山ガラス比分析

(1) 分析試料と分析方法

B区T4において採取された試料のうち、17点の試料について火山ガラス比分析を行い、火山ガラス質テフラの特徴記載と降灰層準の把握を試みた。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料10gを秤量。
- 2) 超音波洗浄装置により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

分析の結果をダイヤグラムにして図4に、分析結果の内訳を表1に示す。火山ガラス比分析の結果、試料23から試料17にかけて、比較的多くの分厚い中間型ガラスが含まれている。試料16より上位では、透明で平板状(バブル型)火山ガラスが増加する。とくに試料15のテフラ層にもっとも多く火山ガラスが含まれている。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

分析試料中最下位の試料23、石英が多く含まれている試料20、橙色軽石が含まれている試料9の3点について、温度一定型屈折率測定法(新井、1972、1993)により屈折率の測定を行った。

(2) 測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。試料23には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.700-1.708である。試料20には、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.710-1.726(modal range:1.720-1.725)である。試料9にも、重鉱物として斜方輝石や単斜輝石が含まれている。斜方輝石(γ)の屈折率は、1.705-1.707である。

5. 考察

B区T4の試料23に含まれるテフラのうち、斜方輝石については、その屈折率から霧島イワオコシテフラ(Kr-Iw、遠藤ほか、1962、町田・新井、1992)や霧島イワオコシテフラ(Kr-Aw、遠藤ほか、1962、町田・新井、1992)など、霧島火山起源のテフラに由来すると考えられる。試料20に含まれるテフラは、始良大塚テフラ(A-Ot、Nagaoka、1988)など始良火山起源のテフラに由来すると考えられる。始良カルデラ起源のテフラの中では、給源から北西方向を中心に分布している、A-Otの可能性がもっとも高いと思われる。成層したテフラ層は、層相や火山ガラスの形態や色調さらに屈折率などから、約2.4~2.5万年前*1に始良カルデラから噴出した始良Tn火山灰(AT、町田・新井、1976、1992、松

本ほか、1987、池田ほか、1995)に同定される。さらに試料9に含まれるテフラは、約1.4~1.6万年前*1に霧島火山から噴出した霧島小林軽石(Kr-Kb、伊田ほか、1956、早田、1997)に由来すると考えられる。この地点で検出された石器の層位は、Kr-Kb混じりの上層中にあると考えられる。なお、A区T3やA区T10の橙色軽石も、層位や岩相などからKr-Kbに由来すると考えられる。

6. まとめ

春日遺跡第2地点において、地質調査、火山ガラス比分析、屈折率測定を合わせて行った。その結果、下位より始良大塚テフラ(A-Ot)、始良Tn火山灰(AT、約2.4~2.5万年前*1)、霧島小林軽石(Kr-Kb、約1.4~1.6万年前*1)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6,300年前*1)などを検出することができた。発掘調査で検出された石器は、Kr-Kb混じりの包含層中に層位があると考えられる。

*1 放射性炭素(14C)年代。

文献

新井房夫(1972)斜方輝石・角閃石によるテフラの同定—テフロクロノロジーの基礎的研究。第四紀研究、11、p.254-269。

新井房夫(1993)温度一定屈折率測定法。日本第四紀学会編「第四紀試料分析法2—研究対象別分析法」、p.138-149。

伊田一善・本島公司・安国 昇(1956)宮崎県小林市付近の天然ガス調査報告。地調報告、no.168、p.1-44。

池田晃子・奥野 充・中村俊夫・小林哲夫(1995)南九州、始良カルデラ起源の大隅降下軽石と入戸火砕流中の炭化樹木の加速器14C年代。第四紀研究、34、p.377-379。

町田 洋・新井房夫(1976)広域に分布する火山灰—始良Tn火山灰の発見とその意義—。科学、46、p.339-347。

町田 洋・新井房夫(1978)南九州鬼界カルデラから噴出した広域テフラ—アカホヤ火山灰。第四紀研究、17、p.143-163。

町田 洋・新井房夫(1992)火山灰アトラス。東京大学出版会、276p。

松本英二・前田保夫・竹村恵二・西田史朗(1987)始良Tn火山灰(AT)の14C年代。第四紀研究、26、p.79-83。

Nagaoka, S. (1988) The late Quaternary tephra layers from the caldera volcanoes in and around Kagoshima Bay, southern Kyushu, Japan. Geog. Rept., Tokyo Metropol. Univ., 23, p.49-122.

早田 勉(1997)火山灰と土壌の形成。宮崎県史通史編1、p.33-77。

表1 B区T4の火山ガラス比分析結果

試料	bw(cl)	bw(pb)	bw(br)	md	pm(sp)	pm(fb)	その他	合計
1	2	0	0	0	0	0	248	250
3	1	0	0	0	0	0	249	250
5	1	0	0	0	0	0	249	250
7	0	0	0	0	1	0	249	250
8	3	0	0	1	1	0	245	250
9	8	0	0	2	0	0	240	250
11	19	0	0	1	0	2	228	250
13	29	0	0	6	0	3	212	250
15	50	0	0	10	2	3	185	250
16	8	0	0	0	1	4	237	250
17	1	0	0	12	0	0	237	250
18	1	0	0	6	0	0	243	250
19	0	0	0	5	1	0	244	250
20	0	0	0	7	1	1	241	250
21	1	0	0	5	0	2	242	250
22	0	0	0	4	1	0	245	250
23	0	0	0	3	0	0	247	250

数字は粒子数。bw：バブル型、md：中間型、pm：軽石型、cl：透明、pb：
：淡褐色、br：褐色、sp：スポンジ状、fb：繊維束状。

表2 B区T4における屈折率測定結果

試料	火山ガラス (n)	重鉱物組成	斜方輝石 (γ)
9	—	opx>cpx	1.705-1.707
20	—	opx>cpx	1.710-1.726(1.720-1.725)
23	—	opx>cpx	1.700-1.708

屈折率の測定は、温度一定型屈折率測定法（新井、1972、1993）による。opx
：斜方輝石、cpx：単斜輝石、(): modal range.

第6節 まとめ

春日地区遺跡第2地点は、一ツ瀬川と小丸川に挟まれた洪積台地に位置する。この洪積台地上では、旧石器時代から縄文時代後晩期にかけての遺跡がいくつか確認されている。今回の発掘調査は謎層になるアカホヤ火山灰、小林軽石火山灰および始良Tn火山灰を手掛かりに調査を進めた結果、縄文時代早期・後期、後期旧石器時代の遺構・遺物を確認するに至った。ここでは遺構・遺物に若干の考察を加え、遺構の性格を明らかにしたい。

1 テフラ分析と基本土層

本遺跡の発掘調査においてアカホヤ火山灰、小林軽石、始良Tn火山灰層は指標になる火山灰であり、今回古環境研究所に委託した自然科学分析は、本遺跡の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知る手がかりになる。そこで本遺跡の基本土層と分析の結果を照合する。

テフラ分析においてA区T10(図4参照)の橙色軽石混じり暗灰色土、橙色細粒軽石に富む黒灰色土、橙色細粒火山灰層ブロック混じり褐色土中から鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、町田・新井、1978)と考えられる」という結果がでた。したがって橙色細粒軽石と橙色細粒火山灰層は基本層序IV層(図3参照)に該当する。したがって橙色細粒軽石と橙色細粒火山灰層を含む層、その上層において出土した遺物は降灰以降の遺物と推測できる。

また火山ガラス比分析、屈折率測定の結果、下位より始良大塚テフラ(A-Ot)、始良Tn火山灰(AT、約2.4~2.5万年前*1)、霧島小林軽石(Kr-Kb、約1.4~1.6万年前*1)、鬼界アカホヤ火山灰(K-Ah、約6,300年前*1)などを検出することができた。

2 後期旧石器時代

春日地区遺跡第2地点では、後期旧石器時代における2つの石器群が検出された。

第I文化層は、始良Tn火山灰層直上のⅧ層においてナイフ形石器やスクレイパー類、磨石、敲石で構成される石器集中部並びに礫群、配石遺構が確認されている。平面・垂直分布や石器群からは遺物集中区が2ヶ所見受けられ、石器製作が行われていた可能性を示唆している。配石遺構は、隣接した隣でのみ接合関係が見られる。動かした形跡はない。したがって使用目的は全容が解明されていないが、本遺跡は当時の生活の場として使用されていた可能性が高いと思われる。遺物の中でナイフ形石器が多く出土した。本書では大きくⅢ類に分けたが今後さらに細分化し、特徴を明確にしていきたいと考える。

第II文化層は小林軽石降灰直前・直後のVIb~VIIb層において細石刃、細石刃核で構成される石器集中部である。遺構は確認されていない。遺物の中では細石刃・細石刃核が多く出土した。本書では大きくVI類に分けたが今後さらに細分化し、特徴を明確にしていきたいと考える。

今回の調査において出土した石器の石材としては頁岩・砂岩・ホルンフェルス・黒曜石が多いことが明らかになった。これらの礫が、後期旧石器時代の第I・第II文化層において使用されていた可能性が高いと思われる。後期旧石器時代の第I・第II文化層において使用されていた礫のうち、頁岩・砂岩については、段丘礫や一ツ瀬川の河床礫を使用していたと考えられる。しかし現在一ツ瀬川に石器に適した礫は余りないということから、搬入の可能性は考えられる。黒曜石の入手先については桑ノ木津留、小国、日東産のものと類似した黒曜石が確認されたが、今後検討していきたい。

表11 層別製品出土数

	細石刃	細石刃核	スクレイパー	ナイフ形石器	合計	備 考
VI a層	0	1		0	1	
VI b層	1	4	0	2	6	
VII a層	1	7	0	2	10	小林軽石層
VII b層	1	5	0	1	7	
VIII 層	1	2	4	14	21	
IX 層	0	1	3	17	21	始良Tn火山灰層
一 括	1	1	0	0	2	
合計	5	21	7	35	68	

3 縄文時代早期及び後・晩期について

(1) 遺 構

縄文時代早期を代表する遺構として集石遺構がある。集石遺構は、動植物を調理する機能を有する調理場跡や炉跡等が想定されている。春日地区遺跡第2地点からは4基の集石遺構が検出された。これらの集石遺構は掘り込みを持つもの(SI2・4)持たないもの(SI1・3)に分けられる。またSI4で炭化物が検出されており、礫も半数以上が赤変している。このようなそれぞれの遺構の特徴からの遺構の使用状況を予測してみた。

SI1は、礫の密度が密であり、赤変した礫はあるが4つの集石遺構の中で1番割合が低い。炭化物・掘り込みは確認できない。したがって準備礫の可能性はある。SI2は、礫の密度が密であり、赤変した礫・掘り込みは確認できるが、炭化物は確認できない。したがって使用目的を明確にできていない。SI3は礫の密度が疎であり、赤変した礫は確認できるが、炭化物・掘り込みは確認できない。したがって廃棄礫の可能性はある。SI4は礫の密度が密であり、赤変した礫・炭化物は確認できる。掘り込みははっきりしない。したがって調理場の可能性はある。また本遺跡から東へ500mの場所にある瀬戸口遺跡では本遺跡と同時期の集石遺構が24基確認されている。瀬戸口遺跡で出土した押型文土器や目殺条痕文土器は確認できなかったが、この付近の広範囲において人々が生活していた可能性は高いと思われる。

後・晩期竪穴式住居が1軒、土坑2基が検出された。竪穴住居と隅丸方形プランである。柱穴・炉跡は確認できなかった。深さは最深部で15cmと浅く、掘り込みの時期と埋土中の遺物の時期差は余り無いと思われる。遺物は250点程出土している。土器では、時期が明らかなものとしては「三万田式」の浅鉢と思われる小片、石鏃、石錘、敲石、打製石斧、石核が出土している。遺構の時期については遺物から縄文時代後期後葉とした。

その他総数約362のピット群である。近年の人為的削平により遺構の時期が不明であることや、時期が新しい掘り込みが加えられていることから明確な遺構としてとらえにくいのが、掘立柱建物の柱穴の可能性はあると思われる。

(2) 遺物

縄文時代早期は、無文土器の破片が多く特徴を確認できなかった。石器では敲石、台石そして数多くの破片、剥片、石核が出土した。敲石（敲石は石器製作の可能性もある。）、台石は調理具として使用されたものと思われる。

A B区あわせて3000点以上の土器片と石器が出土している。土器では、「三万田式」(1)「鳥井原式」(2)「御領式」(3)「上南部Ⅲ期式」(4)「上南部Ⅳ期式」(5)と思われる後期後葉から晩期初頭にかけての土器片が多く出土した。土器片は、熊本県出土の土器の影響を受けている。児湯郡新富町という位置を見ると九州山地を越える人の往来がされていた可能性が考えられる。また土製品では土偶が出土した。県内でも土偶の出土例としては高千穂町の陸内遺跡、清武町の竹ノ内遺跡等があるが、県央部では、数少ない事例である。石器では、磨石、敲石、打製石斧、磨製石斧、石鏃、台石、石皿、砥石等が出土した。本遺跡では、石鏃は数点しか出土していない。これに対して石鏃は数多く出土している(第9・10図A・B区山土石器統計表参照)。狩猟よりは漁労に比重を置いていたと思われる。植物採集が盛んであったことが石斧、磨石、台石・石皿が多く出土したことから裏付けられると思われる。また同じ層から打製石斧、刃部磨製石斧、磨製石斧が出土している。これは石斧製作が行われていると考えべきか、様々な石斧が流通していたのか意見が分かれるところである。またピット群は石器製作のための掘立柱建物の柱穴という仮説も考えられるが、遺構の時期も含めて今後の検討課題としたい。

註(1)～(5) 富田絏・その他 1986 「戸坂遺跡発掘調査報告書」 付論Ⅱ「西西南麓の未紹介遺跡」熊本市教育委員会

〈参考文献〉

富田絏・その他	1986	「戸坂遺跡発掘調査報告書」	熊本市教育委員会
山高孝司	1986	「瀬戸口遺跡発掘調査報告書」	新富町教育委員会
高山富雄 山田洋一郎	2000	「竹ノ内遺跡発掘調査報告書」	宮崎県埋蔵文化財センター
長津宗重 H高裕司 木下 剛 山田洋一郎	2002	「上ノ原遺跡発掘調査報告書」	宮崎県埋蔵文化財センター
中村倉司	1999	「雑群と集石土坑」 第36号	埼玉考古学会



春日地区遺跡第2地点遠景(東上空から)



春日地区遺跡第2地点全景（北上空から）



A区全景



B・C区全景



A区遺物流れ込み



B区遺物集中区



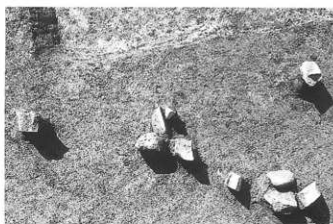
基本土層



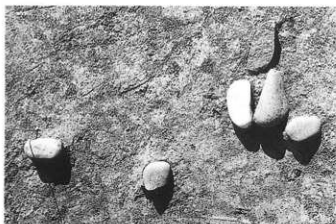
礫群1



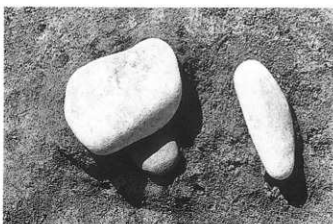
礫群2



礫群3



礫群4



礫群5



礫群7



配石遺構



SI2



SI4



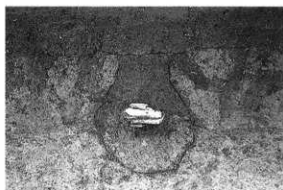
SC1



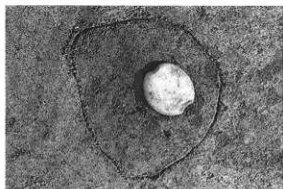
SC2



ビット群



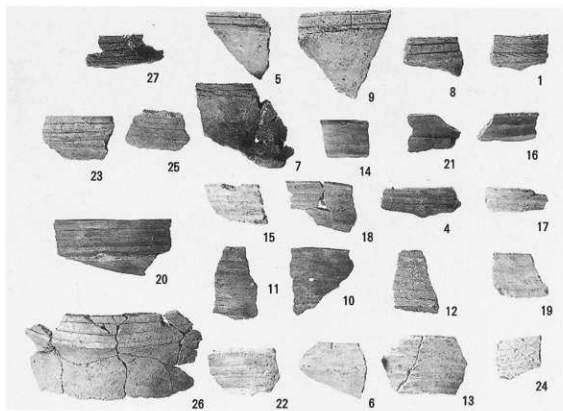
埋土中に土器・石斧を含むビット



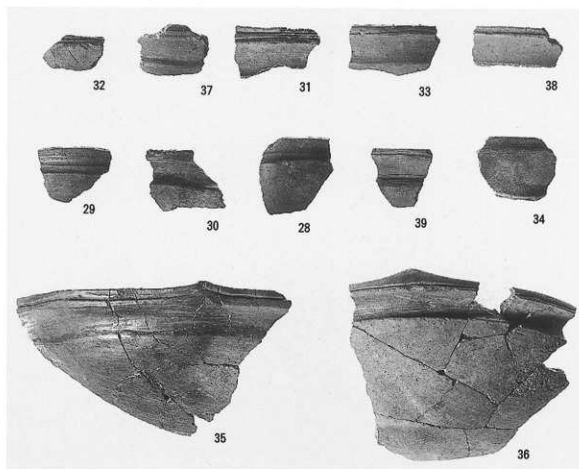
埋土中に石錘を含むビット



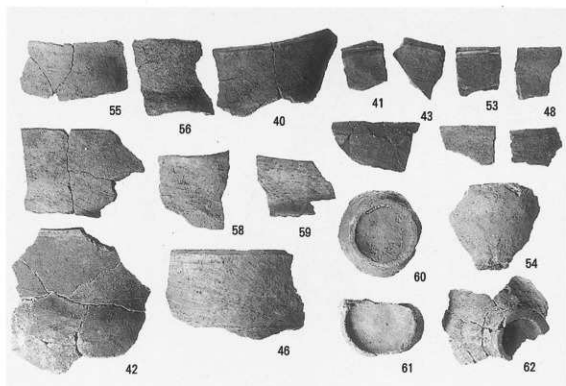
SA1



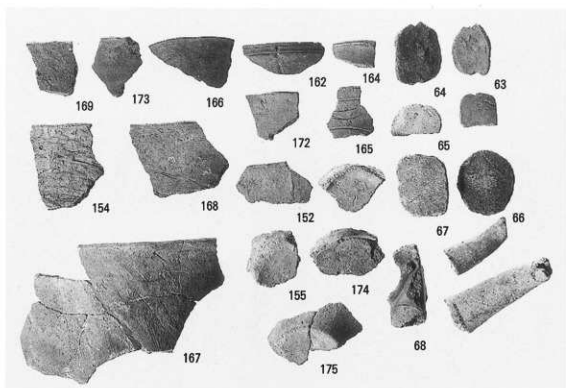
縄文土器



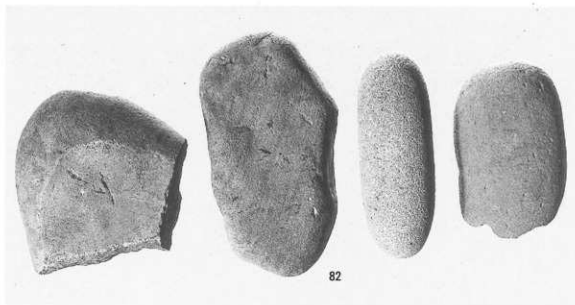
縄文土器



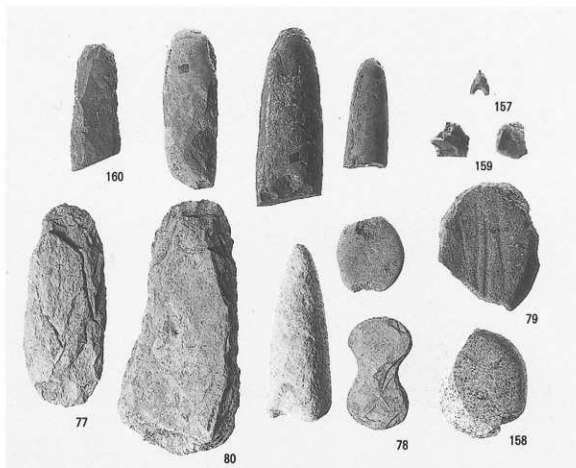
繩文土器



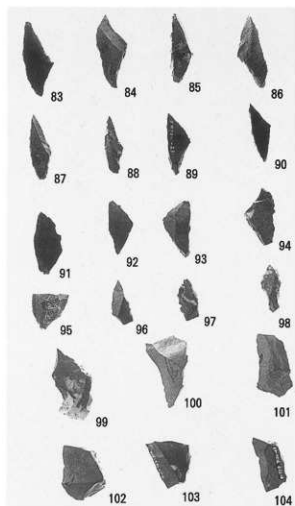
繩文土器



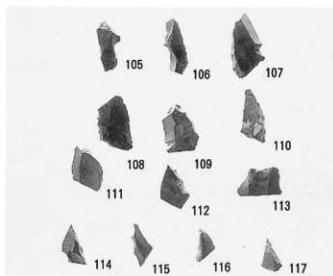
縄文石器（台石 石皿）



縄文石器（SA1 ビット出土遺物）



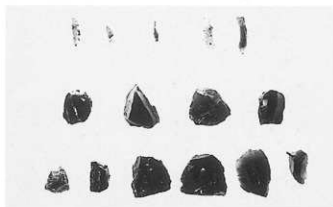
ナイフ形石器



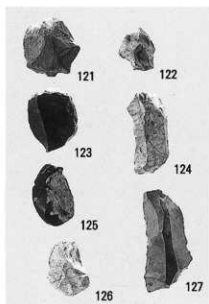
ナイフ形石器



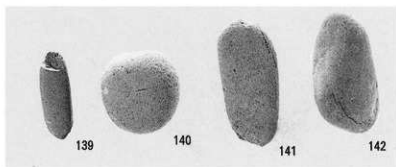
細石刃 細石刃核



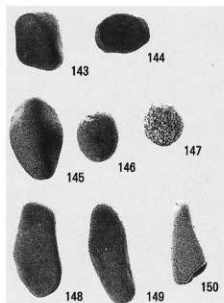
細石刃核



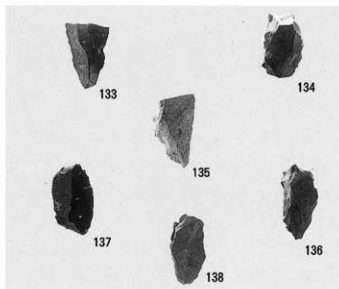
磨石 敲石



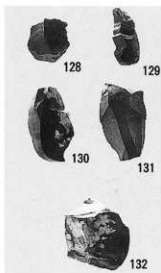
磨石 敲石



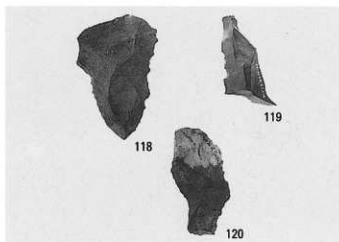
磨石 敲石



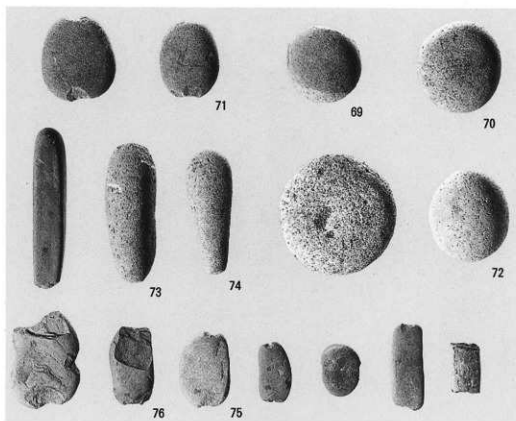
削器・二次加工剥片・剥片



石核・剥片



二次加工剥片



縄文石器



作業風景